南関東の弥生集落の立地（要旨）

浜田 晋介

１．南関東の弥生時代集落の特徴

弥生時代の集落は、神奈川県内の事例を基に行われた研究が、大きな影響を及ぼしてきた（和島・岡本 1958、田中 1976）。その基礎となったのは、三殿台遺跡、朝光寺原遺跡、大塚遺跡・歳勝土遺跡などの横浜市の遺跡群であった。舌状台地上や台地上の環壕で囲まれた範囲に、住居数が多く検出される集落の姿は、農業共同体を形成する集団の理論的枠組の提示（近藤 1959、都出 1970）と理論上の谷水田の存在を背景に、水稲農耕社会の拠点的な集落ととらえられてきた。そしてそれが全国的な弥生時代集落のモデルとして考えられてきた。その後調査された横浜市折本西原遺跡、秦野市砂田台遺跡、三浦市赤坂遺跡など、県内を代表する弥生時代集落も、同じように台地や丘陵上から確認されており、南関東の弥生時代集落は、水稲耕作を行うには不利な地形条件ではあるが、それを克服して高位面に大規模に展開する姿として、理解されてきた。

こうした理解に対して、台地や丘陵に存在する弥生集落が、水稲農耕を軸に生産活動を行ってきたのか、という疑問をもちながら筆者は研究を行ってきた。その研究の一端は谷水田の実態究明（浜田 2007b）、弥生時代の住居に置かれた土器や炉・床面出土の炭化種子の集成を行って（浜田 2007a）、畑作の敷衍的な存在を強調してきた。また、遺跡の分布を通して、狭い範囲に時間的（土器型式の差）に連続して集落が存在することから、集落が移動していることを考え（浜田 2003）、最近は住居址が不連続に重複する事例から、一つの集落は継続・連続して連綿と住居が作られ続けるのではなく、断絶を持ちながら住居が作られ、見かけ上集落が存続していることの分析・論証を別稿で用意している。

こうした筆者の考えのなかで、近年明らかになってきた低地集落に注目し、南関東の弥生時代集落の基本的な姿について、現在分析を進めているところであるが、その中間的な分析結果を報告し、神奈川の弥生時代集落の新たな解釈を行う試案を提示してみたい。

２．低位面集落と高位面集落

南関東で近年確認されてきた小田原市中里遺跡、千葉県常代遺跡、埼玉県池上遺跡・小敷田遺跡などの弥生時代の低地集落は、台地上の集落との関係を考える上で大きな意味を含んでいる。これによって本格的な灌漑水田導入時期が中期中葉にまで遡る可能性が高く、南関東での本格的な水稲農耕社会の開始時期に、関西・東海地域を巻き込んだ、複雑な成立様相が展開していることが次第に明らかになってきた（石川 2001、設楽 2006）。また、南関東の弥生時代集落研究は、これまで台地・丘陵上、いわば高位面に展開する集落を基に分析がされてきたことに対して、河川氾濫原や海

岸平野などの低位面に存在する遺跡にも注意を向けて分析する必要性が出され、実際にその確認作業がなされてきたことも重要である（上本・大村 1996、浜田 1998、及川 1998・1999・2001・2002・2003、石川 2000・2002、安藤 2004、弥生時代研究プロジェクトチーム 2007）。こうした研究姿勢からようやく水稲農耕を機軸とした弥生集落が、南関東でも他地域に比較できる形として整ってきたといえる。

しかし、低位面の集落と高位面の集落の関係が、良好にとらえられる事例は多くない。ここでは東京湾東岸の千葉県木更津市域のうち、小櫃川・矢那川・烏田川流域の遺跡群を分析し、神奈川県内の弥生時代集落を考える材料にしておく。

矢那川流域にある請西遺跡群は古墳群を除けば、大山台遺跡、道上谷遺跡、庚申塚Ａ遺跡、庚申塚Ｂ遺跡、野焼Ａ遺跡、野焼Ｂ遺跡、鹿島塚Ａ遺跡、鹿島塚Ｂ遺跡、東山遺跡、山伏作遺跡、中郷谷遺跡で構成されている。このうち弥生時代の遺跡は、大山台遺跡、庚申塚遺跡、野焼Ｂ遺跡、鹿島塚Ａ遺跡、鹿島塚Ｂ遺跡、中郷谷遺跡、東山遺跡であり、鹿島塚Ｂ遺跡・中郷谷遺跡が低位面である以外は、台地上の集落である（第１図）。鹿島塚Ａ・Ｂ遺跡より北側の遺跡に注目してみよう。

鹿島塚Ａ遺跡は西に続く馬の背状の尾根筋に展開する庚申塚Ａ・Ｂ遺跡で確認された方形周溝墓群とともに環壕集落を形成する。中期後半・宮ノ台期の環壕（内環壕）と後期前半の環壕（外環壕）を持っている。遺跡の南半分が未調査であり、全体の規模は分からないが、内環壕は 5,700 ㎡、後期前半の外側環壕は 12,400 ㎡ほどの面積をもつと推定しており、外環壕は横浜市大塚遺跡の 17,900 ㎡、横浜市朝光寺原遺跡の 18,000 ㎡には及ばないものの、横浜市殿屋敷遺跡の 4,100 ㎡や東京都山王遺跡の 11,000 ㎡を超える規模である（岡野 1994）。

鹿島塚Ｂ遺跡は鹿島塚Ａ遺跡が展開する台地の北東裾段丘上にあり、東側を矢那川が流れる。鹿島塚Ａ遺跡との比高差は 30m 以上ある。弥生時代中期後半の竪穴住居 10 軒・溝１条、弥生時代後期の竪穴住居址 13 軒が確認されており、宮ノ台式期以前にさかのぼる土器の出土はあるが、本格的な集落形成は宮ノ台式期で、この点は鹿島塚Ａ遺跡と同じである（豊巻 1991、當眞 2003）。鹿島塚Ｂ遺跡は台地の裾部の狭い段丘上に展開しており、その範囲は定かではないが、次に述べる中郷谷遺跡の形態をみれば、台地裾の段丘面にそって、北・南に延びる可能性が考えられる。

中郷谷遺跡は鹿島塚Ａ遺跡を挟んで、鹿島塚Ｂ遺跡と反対側の谷部に展開するが、谷は幅が広く傾斜もゆるやかになっているため、斜面上にも住居址が存在する。63 軒の弥生時代後期の竪穴住居が確認されており（豊巻 1991、松谷 1993）、その大部分は後期前半から後期中葉の段階である。鹿島塚Ａ遺跡、鹿島塚Ｂ遺跡でも同時期の集落が作られているが、中郷谷遺跡出土土器は結節文を持つ壺が目立ち、中郷谷遺跡の方が新しい段階まで集落の場所として利用されたようである。中郷谷遺跡の上方の馬の背状の台地上には、方形周溝墓が展開する庚申塚Ａ遺跡、庚申塚Ｂ遺跡があり、これ以外にも野焼Ａ遺跡・野焼Ｂ遺跡・大山台遺跡などから中期後半ー古墳時代前期までの方形周溝墓が確認されている。大山台遺跡からは中期後半と後期の住居が確認されている。

また、詳細は不明だが、鹿島塚Ｂ遺跡の北方の台地上には東谷遺跡が存在し、弥生時代後期の環壕集落が確認されている（酒巻 2007、斉藤 2005）。

木更津市の小櫃川と矢那川の河口域には沖積地が展開するが、ここには海岸線に並行して数本の砂丘列が形成されている。また小櫃川の自然堤防も発達している（高梨 2001）。この砂丘列や自然堤防のいわゆる微高地上に古墳が占地していることは確認されていたが、近年弥生集落も数多く確認されてきた。小櫃川に近い微高地では弥生時代後期の集落である、本郷１丁目遺跡・本郷３丁目遺跡・高砂遺跡・松山遺跡・水深遺跡が隣接して確認されている。また砂丘列には四房遺跡で弥生時代後期前半の集落が確認されている（第１図）。この四房遺跡の南東約 200m に請西遺跡群から続く台地の西端が存在し、その台地上に千束台遺跡がある。千束台遺跡からは後期前半の住居とともに、中期の環壕集落も確認されている（栗田 2003）。住居は後期前半の時期でも 60 軒以上の住居が確認されている（稲葉・浜崎 1991）。

請西遺跡群や千束台遺跡と異なり、周辺に生活環境として、また水稲耕作地に適した低位面を持たない高位面集落として、マミヤク遺跡がある（小沢 1989・1993）。海岸線から急激に立ち上がる、比高差 30m 以上の台地上に展開し、北から深い谷が入り込む。隣接する俵ヶ谷遺跡と合わせて、弥生時代中期後半の住居 3 軒、後期中葉から後半の住居 158 軒が確認されている。また、同じような景観を呈するのが大畑台遺跡で、谷水田以外は水稲耕作の可耕地はない。谷水田からの収穫が不安定であるならば（浜田 2007ｂ）、大畑台遺跡もこのタイプの遺跡とすることができる。

３．弥生集落の基本的な形

木更津市の遺跡群を概観してきた。これらの遺跡から導き出されるのは、沖積低地に形成された砂丘上や微高地に弥生時代後期の集落は展開し、海岸部から内陸に入り込んだ台地上には中期後半、後期前半、後期中葉、後期後葉の環壕集落が展開することである。さらに周辺に生活環境・水稲耕作地に適した低位面を持たない、高位面の集落が存在している。従来の見解では集落は台地平坦面のある場所では台地に作り、ない場所では微高地に集中するという分析もなされてきた（安藤 2004）。今回見てきた事例を別の視点で考えれば、後期の段階で砂丘など低位面に集落が展開し、その場所は台地に遠い場合もあるし、至近の距離に存在するものもある。また、平坦面を満足にとれない高位面にも集落は展開する。今回例示した鹿島塚Ａ遺跡・鹿島塚Ｂ遺跡・中郷谷遺跡・庚申塚Ａ・Ｂ遺跡との関係、あるいは四房遺跡・千束台遺跡を参考にすれば、至近の距離にある集落の後方の台地上にも環壕集落や大規模な集落が展開するということはいえる。これがどの段階まで遡るのか、今後の調査成果の公表にもよるが、中期後半の段階の住居数は少ないながら低位面・高位面とも確認されているから、宮ノ台期までこうした集落展開を想定することができるだろう。

こうした事例から、弥生時代後期の集落は、基本的には台地などの高位面と谷中・段丘・砂丘の低位面の両面に立地している。こうした関係は近接する君津市の低位面集落である三直中郷遺跡（後

期後半：半澤 2005）と高位面にある中期後半の環濠と後期の集落である鹿島台遺跡（千葉県文化財センター2003）。富津市では後期の低位面遺跡である打越遺跡（酒巻 1992）、川島遺跡（戸倉 1991、野口 1998）、大明神原遺跡（富津市教育委員会 1981）と、高位面にある神明山遺跡（酒巻 1992）、前三舟台遺跡（佐伯 1992）などが存在することからみて、台地の形状に関係なく低位面・高位面ともに集落が展開することは確実である。そしてこれが弥生集落の一般的な姿であった、といえる。すなわち(1)台地や丘陵から離れた低位面の集落（2）低位面の集落と高位面の集落が至近の距離にある集落群（3）周辺に水稲耕地の望めない高位面集落、の３つの集落に大別することができる。

４．神奈川県内の状況

千葉県内の弥生集落の在り方を参考にすると、神奈川県内での様相はどうか。近年いくつかの低位面集落の調査が行われ、相模湾沿岸地域の分布状態も明らかにされた（第２図）。しかし、それでも神奈川県内における、低位面集落と高位面集落の関係を窺える良好な資料は少ないが、小田原地域の事例を代表に推察しておく（第３図）。

小田原城は丘陵と谷・低地部など自然地形を巧みに利用して築造されている。その一角に八幡山丘陵、谷津丘陵があり、この間にある谷戸に、香沼姫の屋敷跡と伝えられる香沼屋敷跡と呼称される遺跡がある。幅 100m 前後のこの谷からは、弥生時代中期中葉の住居址２軒、後期中葉から末葉の住居址 33 軒が検出している（小林 2004）。また、この谷の出口付近、谷津丘陵の先端部上に愛宕山遺跡があり、第 II 地点から弥生時代後期中葉の環壕集落が調査された（浅賀 2008）。狭い範囲の調査であったため集落の全体は分からないが、確認された住居址は 10 軒で、環壕は台地の傾斜に沿うように掘られている。愛宕山遺跡の北には谷を挟んで丘陵が延びているが、その先端に小田原（谷津）遺跡がある。小田原遺跡は丘陵先端部を切り崩した時に出土したもので（杉原 1936）、高位面の集落である。中期中葉から中期後半の土器を出土している。また、久野川右岸の沖積地から、後期中葉から後半の土器の集中地点が検出した、久野下馬道上遺跡がある。この遺跡は明確な住居施設が確認されていないが、酒匂川の沖積低地・自然堤防に存在する中里遺跡や高田南原遺跡などの存在からみて、後期中葉から後半段階の集落が存在した可能性は高いと考えられる。同様に通称諏訪の原丘陵にある諏訪の原遺跡（第３図１）は、台地上（Ａ地点）とその直下の段丘上（Ｂ地点）から、中期中葉と後期中葉以降の土器が出土している。

これらの遺跡は中期中葉の集落である香沼屋敷遺跡と諏訪の原遺跡Ｂ地点が、低位面（谷底・段丘）に展開し、小田原遺跡と諏訪の原遺跡Ａ地点が、高位面（台地先端部）に展開するという形をとる。また、後期中葉以降も低位面に香沼屋敷遺跡、高位面に環壕集落の愛宕山遺跡が、谷口を共通する立地上に展開し、少しはなれて沖積地に久野下馬道上遺跡、諏訪の原遺跡Ｂ地点が存在することとなる。中期中葉段階と後期中葉以降に、低位面と高位面に集落を構える形が見られるのであり、後期中葉以降には台地上に環壕集落も展開するのである。この形は、東京湾東岸の木更津市地

域でみられた在り方と、時期はちがうものの類似したものととらえることができる。両地域の地形的な在り方、高位面（丘陵・台地）と低位面（段丘・自然堤防・沖積地）の比高差や高位面の平坦面の在り方などは、一様ではないが、それでも基本的な集落の在り方は、それほど変化がない。低位面と高位面が共存する地域の場合、前述した弥生時代集落の形のなかで（２）とした形。つまり低位面と高位面の至近の距離に集落が展開することは、相模湾の遺跡を事例にしても、基本的な形として存在していると考える。そしてその形態は、中期中葉段階にもすでに行われていたことがわかり、中里遺跡に代表される（１）の形もこの段階に存在するのである。

神奈川県内ではこの他にも、相模川周辺、とくに寒川町・藤沢市・茅ケ崎市の諸遺跡群の在り方が、低位面と高位面の集落の在り方を考える、モデルケースになると考える。

５．新しい集落研究へ向けて

今後の弥生集落研究に向けてはいくつかの課題があるが、弥生集落に３つの形が存在するのを基本的な形であるとすれば、「高地性集落」の問題は、避けて通れないであろう。

台地上に存在する集落は、これまで低地に存在する一般的な集落との関係において、「高地性集落」として、争乱に関わるいわば特殊な遺跡としてとりあげられてきた経緯がある。南関東では低地の集落が少なかったこともあって、高位面の集落を一般集落として研究してきた。低地面の集落と高位面の集落が混在するのが基本的な弥生集落の在り方であるならば、これまで一般集落と見てきた高位面の集落の性格を「高地性集落」として研究する必要もある。しかし、従来分析・検討してきた台地上の高位面の弥生集落に、「高地性集落」の概念が該当する根拠は薄く、最も大きな要素は環壕だけである。仮に高位面の集落が「高地性集落」であると仮定した場合、高位面集落の食糧はだれが支えたのか、という根本的な問題が存在する。「高地性集落」で自らの食糧を賄ってきたと想定するならば、低位面の集落から相対的に独立していたと考えることもできる。低位面の集落が高位面の集落の食糧を賄うならば、基本的には高位面の集落は生産に従事しない集団である可能性も高くなる。こうした特徴をどのように理論だてるのかといった問題が、「高地性集落」には存在する。むしろ、今後はこれまで盛んに行われてきた、一般集落としての高位面の遺跡と一般集落としての低位面の遺跡として、弥生時代の集落遺跡を考えていく必要があると考える。

こうしたことを前提に、低位面と高位面にある集落が、どのような関係であるのかについて、もう少し分析を行う必要がある。例えば、集落の規模などからみて高位面集落を拠点集落・母ムラ、低位面集落を周辺集落・子ムラという解釈を行うことも可能であろうが（光江 2004)、弥生時代が水稲耕作を指向する社会であるという前提に立つならば、低位面の集落が水稲耕作地の管理・運営を行う上で利便性が高く、こちらを拠点的集落とするほうが合理性はあるだろう。したがって、これまでの高位面に展開する集落を対象にした拠点的・周辺的集落という解釈も、再考を要することとなる。それとともに、高位面の集落と低位面の集落が、それぞれ別々の社会規範・行動原理に則

って社会生活を送っていた可能性も探る必要があるだろう。(1) と (3) の形の集落はそのことを物語っているのかもしれない。また、高位面の集落と低位面の集落は、例えば水稲耕作を行う季節には低位面に、それ以外は高位面に住み分けているということも想定は可能である。

それをどのように理論づけ、論証していくのかが、これから問われることとなる。

＜引用・参考文献＞

浅賀貴広 2008「小田原市愛宕山遺跡第 II 地点」『第 31 回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』神奈川県考古学会

安藤広道 2004「南関東における弥生時代集落遺跡研究の課題-いわゆる「低地」遺跡の評価をめぐって-」『原始・古代日本の集落』同成社

石川日出志 1992「関東台地の農村村落」『新版古代の日本』8.角川書店

石川日出志 2000「南関東の弥生社会展開図式・再考」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版

石川日出志 2001「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学』第 113 号 駿台史学会

石川日出志 2002「南関東の弥生時代後期集落」『弥生の「ムラ」から古墳の「クニ」へ』学生社

井上哲朗 2000『千葉県文化財センター調査報告書第 384 集 東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書 11 - 木更津市中越遺跡 -』

今泉潔 2002『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書6 - 木更津市金二矢台遺跡・堀ノ内台遺跡 -』千葉県文化財センター調査報告書第 436 集

稲葉昭智・浜崎雅仁 1991「千束台遺跡群」『君津郡市文化財センター年報 No8』君津郡市文化財センター

上本進二・大村浩司 1996『文化資料館特別展 湘南の低地遺跡』茅ケ崎市教育委員会

岡野祐二 1994『君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 84 集 請西遺跡郡 III 鹿島塚A遺跡』

岡本孝之 1976「宮ノ台期弥生文化の意義」『神奈川考古』1神奈川考古同人会

小沢洋 1989『小浜遺跡群 II マミヤク遺跡』君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 44 集

小沢洋 1993『小浜遺跡群V』君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 80 集

及川良彦 1998「関東地方の低地遺跡の再検討」『青山考古』第15号 青山考古学会

及川良彦 1999「関東地方の低地遺跡の再検討(2)」『青山考古』第 16 号 青山考古学会

及川良彦 2001「関東地方の低地遺跡の再検討(3)」『青山考古』第 18 号 青山考古学会

及川良彦 2002「住居と掘立柱建物跡(関東)」『静岡県における弥生時代集落の変遷』静岡県考古学会シンポジウム資料集 静岡県考古学会

及川良彦 2003「関東地方の低地遺跡の再検討(4)」『西相模考古』第 12 号 西相模考古学研究会

君津郡市文化財センター 1991「野焼B遺跡」『君津郡市文化財センター年報』No8

栗田則久 2003「東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書 12 - 木更津市山神遺跡・堀ノ内台遺跡(2) -」千葉県文化財センター調査報告第 456 集

小林義典 2004『小田原城下香沼屋敷第 III・IV 地点』小田原市教育委員会 小田原市文化財調査報告書第 121 集

小山裕之 2002『久野下馬道上遺跡発掘調査報告書』久野下馬道上遺跡発掘調査団

近藤義郎 1959「共同体と単位集団」『考古学研究』6-1

斉藤礼司郎 2005『中尾遺跡群発掘調査報告書Ⅴ－ 東谷遺跡 －』木更津市教育委員会

佐伯秀人 1992『前三舟台遺跡』君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 82 集

酒巻忠史 1992『打越遺跡・神明山遺跡』君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 64 集

酒巻忠史 1995『請西遺跡群発掘調査報告書 VI　野焼A遺跡』木更津市教育委員会

酒巻忠史 2007『中尾遺跡群発掘調査報告書 VI－ 東谷遺跡 III －』木更津市教育委員会

設楽博己 2006「関東地方における弥生時代農耕集落の形成過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 133 集

杉山博久・湯川悦夫 1971『小田原市諏訪の前遺跡』 小田原考古学研究会調査報告書2　小田原考古学研究会

杉原荘介 1936「相模小田原出土の弥生式土器に就いて」『人類学雑誌』第 51 巻 1 号　東京人類学会

高梨友子 2001『木更津市四房遺跡』千葉県文化財センター調査報告第 416 集　千葉県教育委員会

田中義昭 1976「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」『考古学研究』22-3

千葉県文化財センター 2003『千葉県文化財センター年報』No27　千葉県文化財センター

都出比呂志 1970「農業共同体と首長権」『講座日本史1』東京大学出版会

當眞嗣史 2001『請西遺跡群発掘調査報告書 VII　庚申塚A遺跡・庚申塚B遺跡』木更津市教育委員会

當眞嗣史 2003『請西遺跡群発掘調査報告書 IX　鹿島塚B遺跡』木更津市教育委員会

戸倉茂行 1991『川島遺跡発掘調査報告書』君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 66 集

豊巻幸正 1991『請西遺跡群発掘調査報告書 III 野焼遺跡群・野焼古墳群第 2 号墳・鹿島塚B遺跡・中郷谷遺跡』
　木更津市教育委員会

野口行雄 1998『富津市川島遺跡』千葉県文化財センター調査報告書第 339 集

浜田晋介 1998「多摩川低地の遺跡について(序説)」『川崎市市民ミュージアム紀要』第 10 集　川崎市市民ミュージアム

浜田晋介 2003「多摩丘陵・下末吉台地における弥生集落の構造」『川崎市市民ミュージアム紀要』第 15 集
　川崎市市民ミュージアム

浜田晋介 2007a「弥生時代炭化種実の検討」『川崎市市民ミュージアム紀要』第 19 集　川崎市市民ミュージアム

浜田晋介 2007b「弥生集落と谷」『日本考古学』第 24 号　日本考古学協会

半澤幹雄 2005『東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書4－君津市三直中郷遺跡(沖田地区・中郷地区)－』
　千葉県文化財センター調査報告書第 522 集

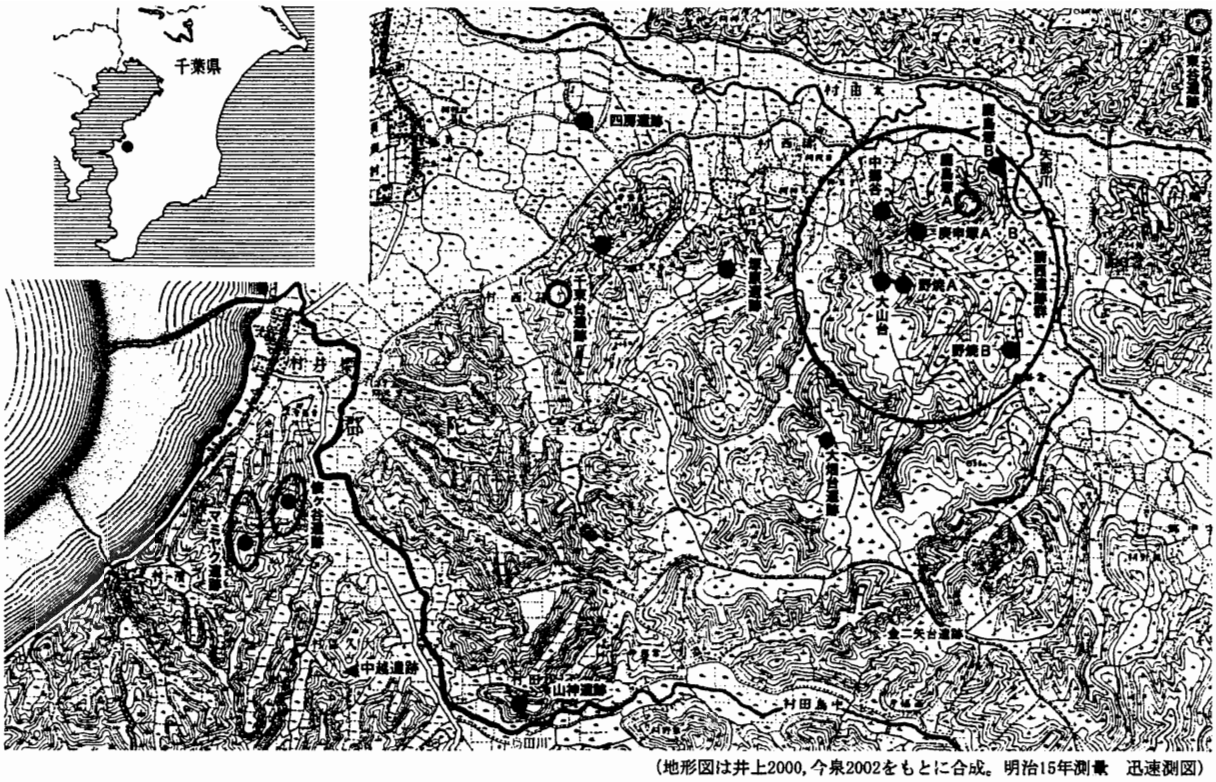
富津市教育委員会 1981『大明神原遺跡発掘調査報告書』

松谷暁子 1993「中郷谷遺跡の炭化粒について」『君津郡市文化財センター年報』No10

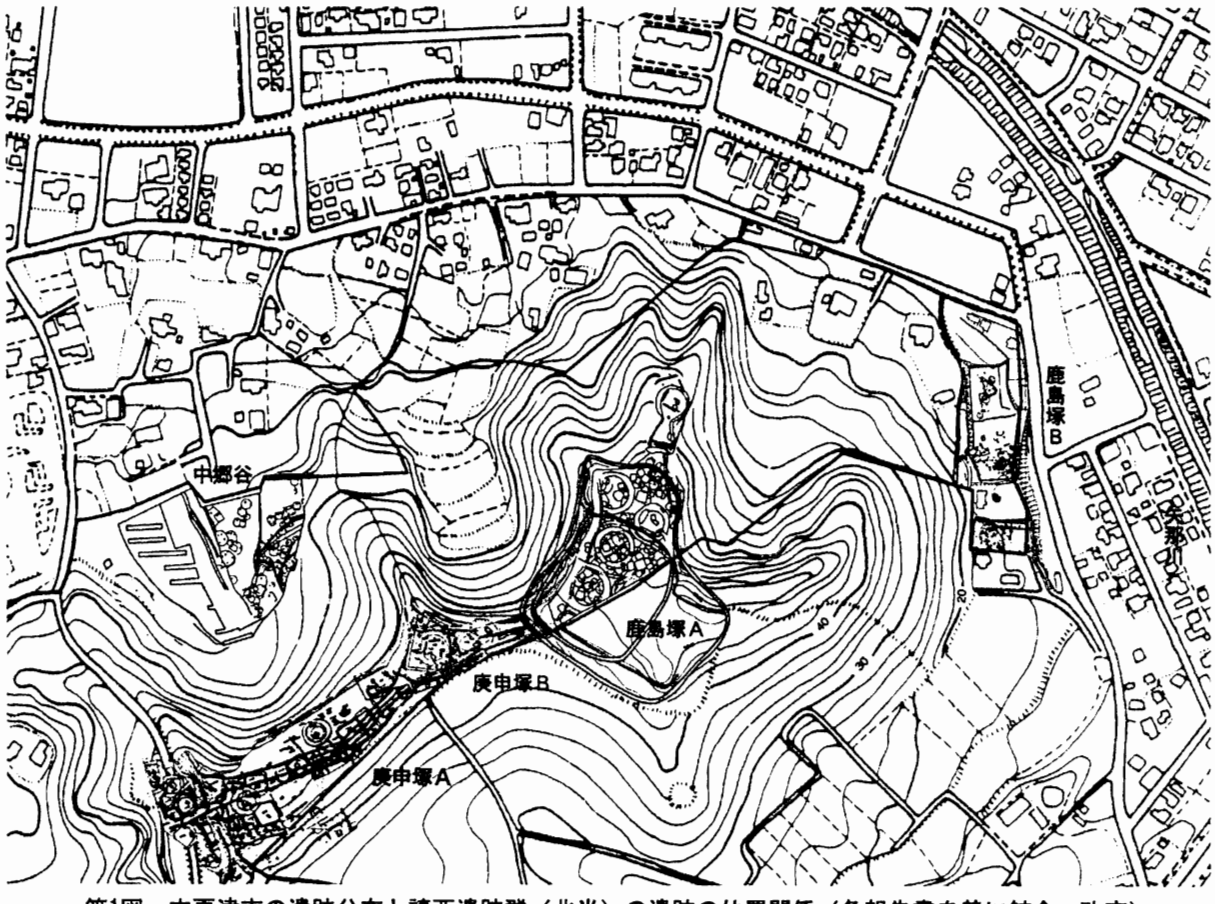
光江章 2004『請西遺跡群発掘調査報告書 X　大山台遺跡』木更津市教育委員会

和島誠一・岡本勇 1958「弥生時代」『横浜市史』横浜市

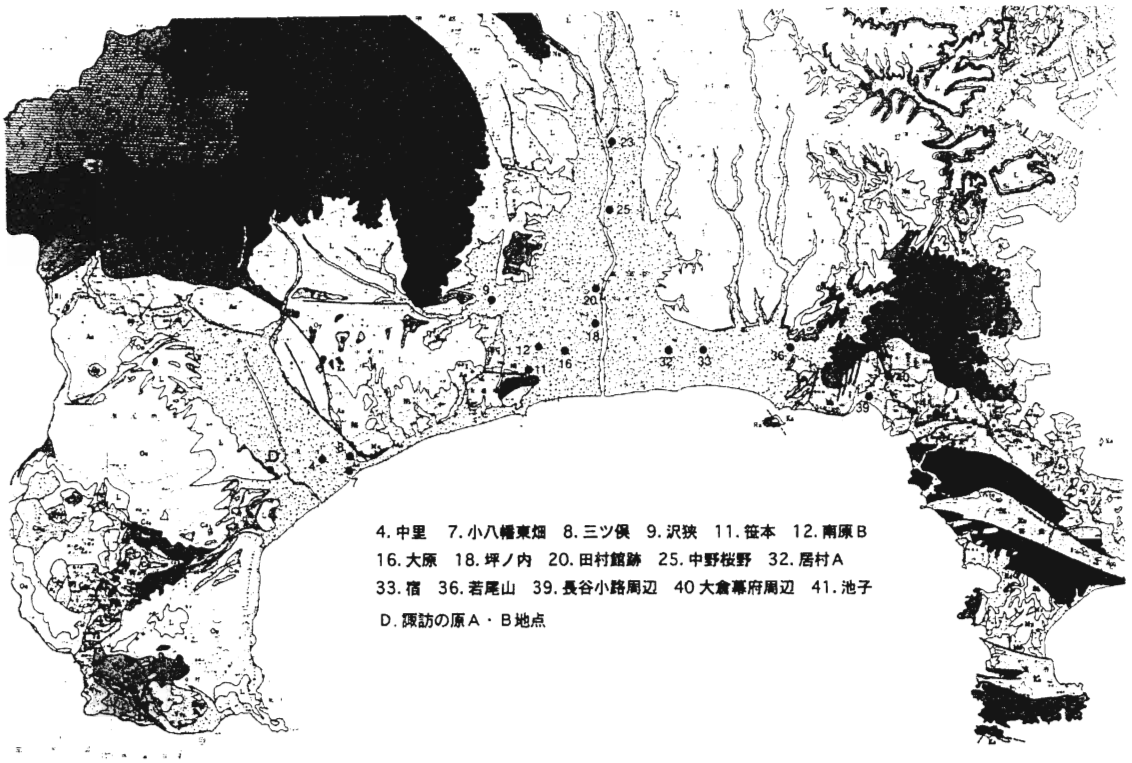
弥生時代研究プロジェクトチーム 2007「相模湾沿岸の「低地」に立地する弥生時代遺跡」『研究紀要 12　かながわの考古学』
　かながわ考古学財団



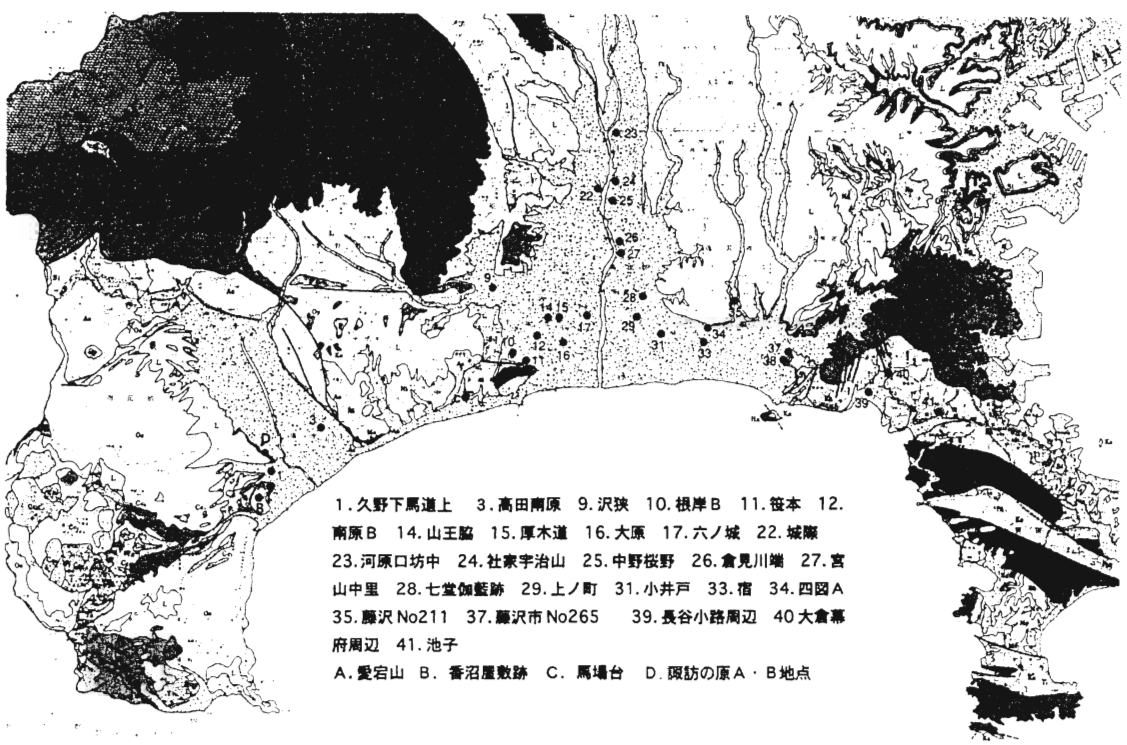
（地形図は井上2000，今泉2002をもとに合成。明治15年測量　迅速測図）



第1図　木更津市の遺跡分布と請西遺跡群（北半）の遺跡の位置関係（各報告書を基に結合・改変）

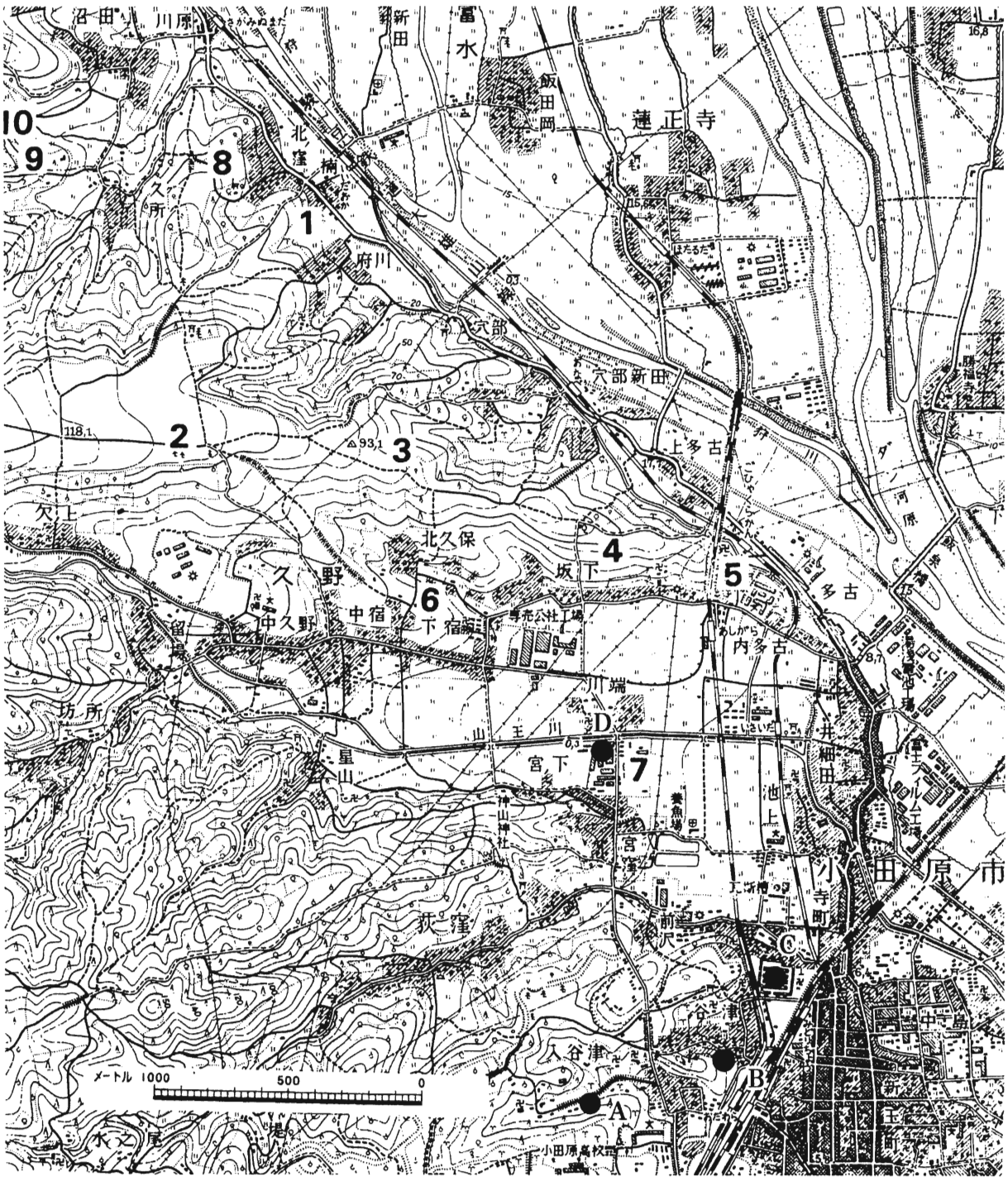


弥生時代中期



弥生時代後期

第2図　相模湾沿岸の低地遺跡を中心とした遺跡分布図（弥生時代研究プロジェクトチーム 2007 原図：改変）



1．諏訪の前遺跡（弥生中期中葉・後期後半）　2．諏訪の原古墳群（古墳時代）　3，一本松遺跡（縄文時代中期・後期）
4．山ノ神遺跡（弥生時代中期後半）　5．白山遺跡（弥生時代中・後半）　6．大畑遺跡（古墳時代前期）
7．市立病院内遺跡（古墳時代前期）　8．小原遺跡（弥生時代後期）　9．土師器散布地　10．北畑の原（縄文時代中・後期）
A，香沼屋敷遺跡　B，愛宕山遺跡　C．小田原（谷津）遺跡　D．久野下馬道上遺跡

第３図　小田原周辺の主要遺跡分布図（杉山・湯川 1971 原図：改変）

大磯町馬場台遺跡出土の土器

-弥生時代後期初頭の地域事情-

立花　実

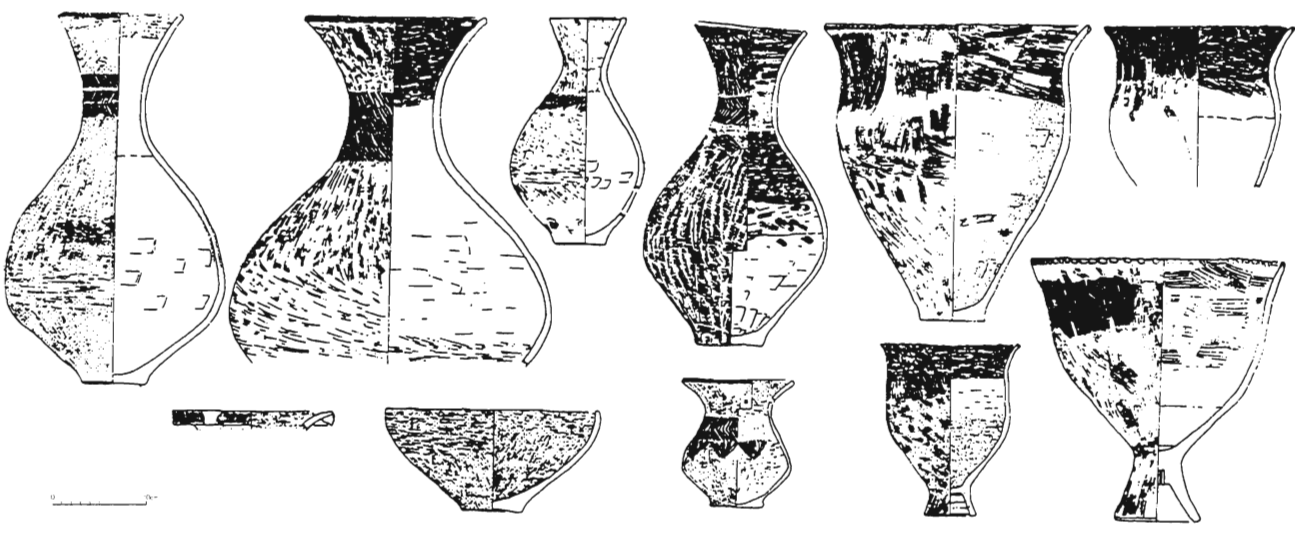
はじめに

今回の考古学講座は「新神奈川・新弥生論」という設定であるが、ここで取り上げる大磯町馬場台遺跡の破片を含むわずか18点の土器がそのテーマにふさわしいとはとても思えない。ただし、一片の土器からも言えることはあるし、そうした細かな積み重ねから歴史を形作っていくことが考古学の方法であることも事実である。そこで、やや風呂敷を広げ気味にはなるが、大磯町馬場台遺跡出土土器を題材に神奈川県西部地域の弥生時代後期の地域事情について考えてみたい。

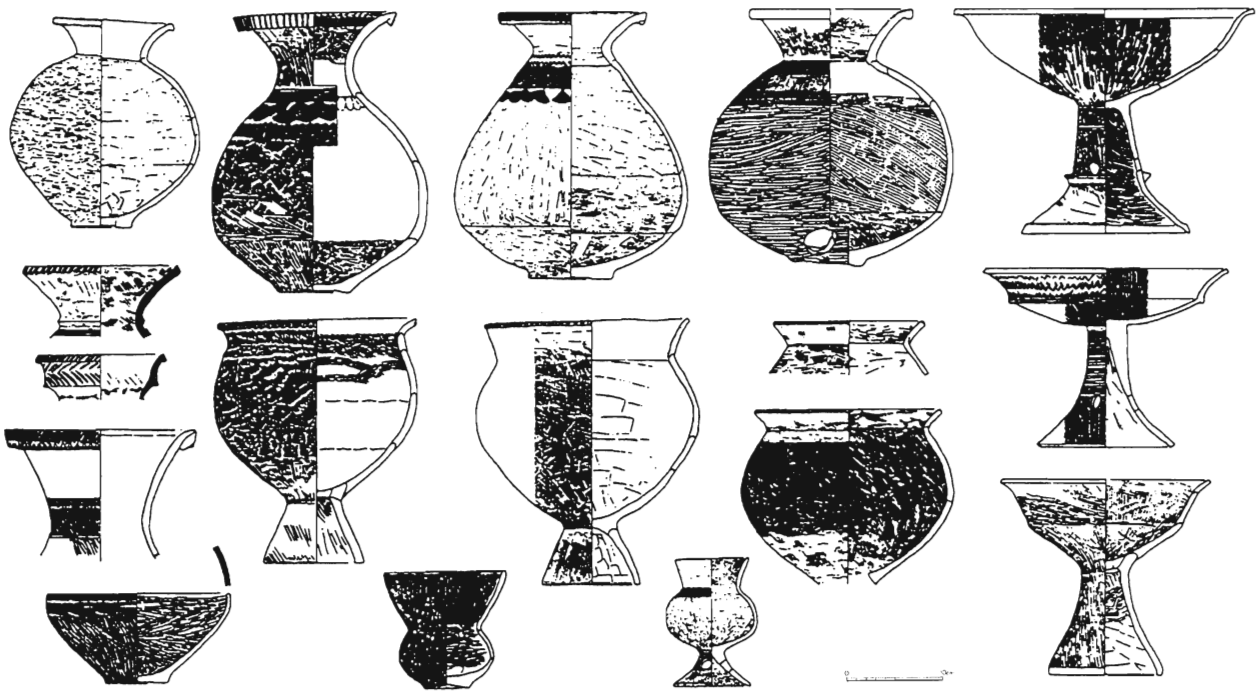
まず、馬場台遺跡に触れる前に、前提となる当地域の弥生時代後期の土器様相について押さえておかなければならない。このことについては、当学会が主催した昨年の神奈川県遺跡調査・研究発表会「神奈川の遺跡調査をめぐる30年」にて、偶然私が担当したテーマがその内容に当たる。そこで、ここではその内容の一部をまとめ直し、前提的理解とする。詳細については、発表要旨に掲載されている「神奈川県西部地域を中心とした弥生時代後期の土器研究」を参照願いたい（註1）。

1．神奈川県西部地域の後期弥生土器の特徴

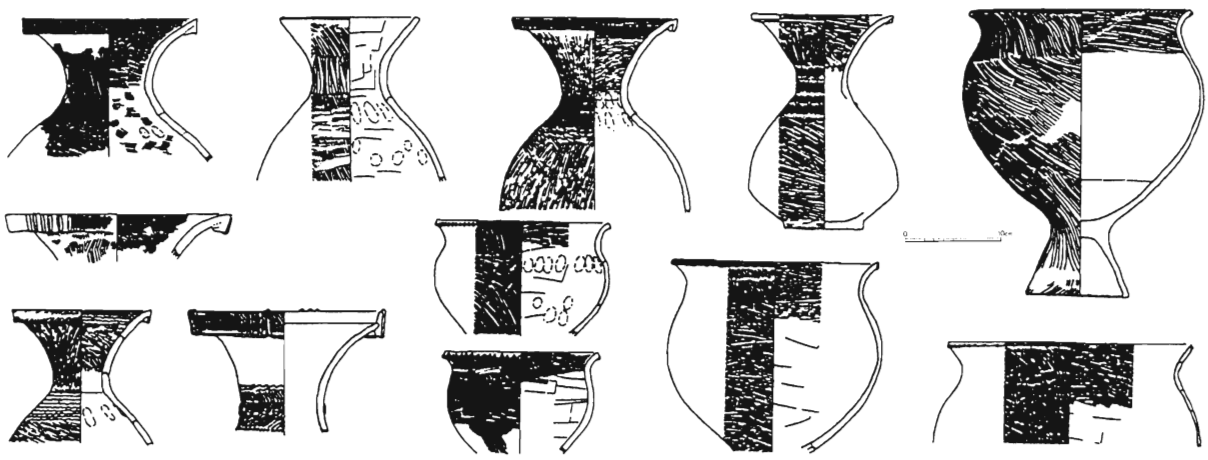
第1図は神奈川県西部地域の弥生時代中期後半、宮ノ台式土器の最も新しい一群である。壺と甕と少数の鉢で構成され、壺は頸が細くなだらかに胴部へと続き、頸と胴の区別はない。甕は最大径を口縁部にもち、低い台が付くものもあるが主体は平底である。



第1図　神奈川県西部地域の弥生時代中期末の土器様相（1/8）



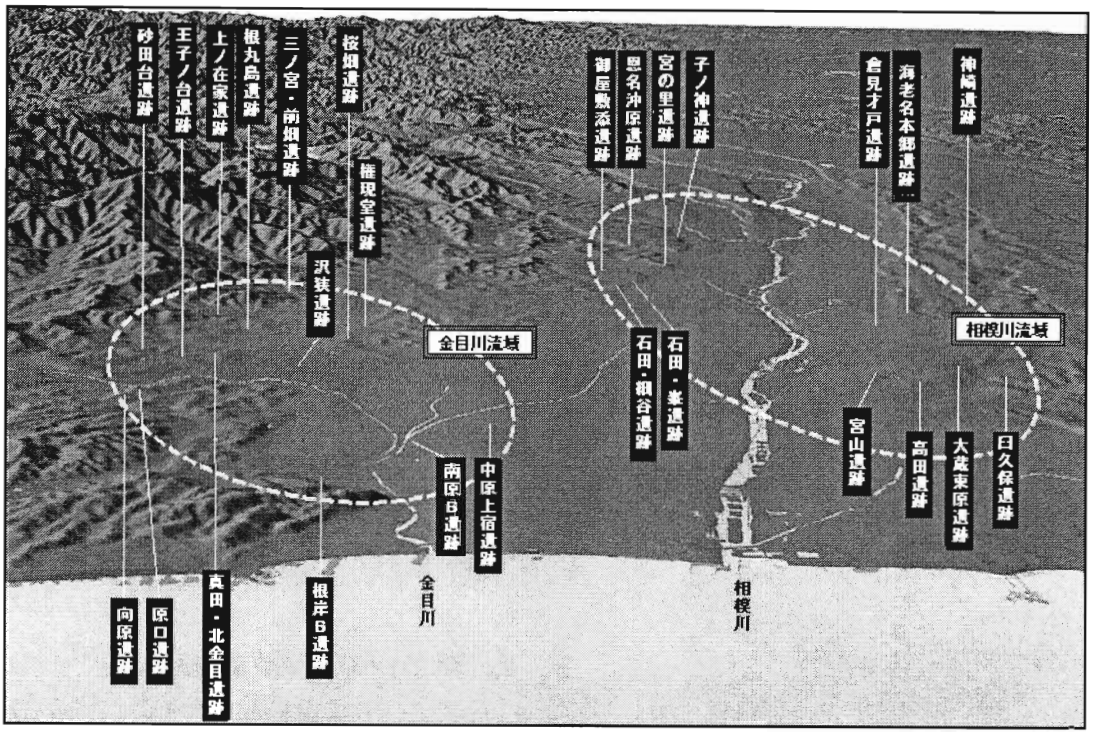
相模川流域



金目川流域

第２図　神奈川県西部地域の弥生時代後期前半の土器様相（1/8）

次の後期前半については、相模川の両岸域と、大磯丘陵の東を流れる金目川流域で大きく土器様相が異なる。第２図上段が、相模川流域（海老名市、綾瀬市、寒川町、茅ヶ崎市、厚木市、伊勢原市と平塚市の東側）に分布する土器群である。壺は頸と胴の境がくっきりと折れ、櫛描による紋様をもつ。甕は台付で、口縁の先端部は面取りされ、なかにはヨコナデで仕上げられているものもみられる。そして、皿状の坏部と柱状の脚部をもつ高坏も櫛描で飾られている。これらは、愛知県と静岡県が接する東三河、西遠江の土器と同じ特徴をもっており、また、壺と甕と高坏がそれぞれ30%を占める器種構成も変わらない。こうした特徴を有する代表的な遺跡が綾瀬市神崎遺跡であり、そ



第３図　弥生時代後期の土器分布圏（金目川流域と相模川流域）

の分析からは出土土器の95%が東海系土器であるというデータが提示されている。

第２図下段は金目川流域の後期前半の土器である。これは平塚市と伊勢原市の西側、秦野市の東側の範囲に分布するもので、直線距離にして十数kmでありながら、相模川流域とは大きく違った様相を呈している（第３図）。壺には口縁部が開くものと内彎するものがあり、主に縄文と櫛の刺突で施文される。甕はほとんどに台が付き、口縁端部はハケによる面取り、端部にはキザミをもつ。高坏はわずかしか出土しない。これらの土器には、静岡県の天竜川から大井川にかけての東遠江と、富士宮市から三島市、沼津市といった東駿河の強い影響をみることができる。

このように、弥生時代中期末（第１図）と後期前半（第２図）の土器には、系統的な連続性がみられない。宮ノ台式土器の終焉後、全く別の系譜の土器がもたらされたのである。後者の後期前半における相模川流域と金目川流域の様相差についても、影響を受けた東海系土器の系譜の違いに起因していると考えられる。

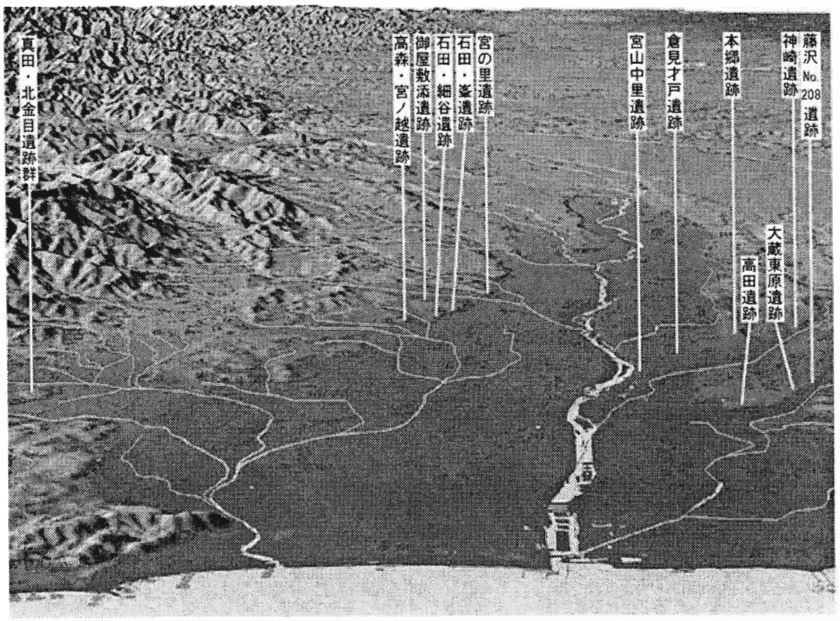
この後、後期後半になると、相模川流域と金目川流域の土器様相は急速に似通ってくる。それは、故知の影響力が弱まったことを意味する。相模川流域では、まず、東三河系、次いで西遠江系の要素が脱落する。一方、金目川流域では東遠江系と駿河系の要素が融合し、相模オリジナルとも言うべき土器様相が形成されていく。そしてそれが、相模川流域にまで広がっていくことで、両地域の様相差が減少していくことになる。

以上のように、神奈川県西部の後期弥生土器は、各時期ごとに異なる地域と交流をもち、それが変容、融合しながら在地化するという非常に複雑なあり方をみせる。

2．土器の系統変化の背景

こうした複雑に系統が錯綜する土器様相はいかにして成立したのか。その背景について考えてみよう。

従来言われていた“宮ノ台式土器の断絶”については、近年、後に触れる真田・北金目遺跡群の新資料により久ヶ原式土器の存在が確認され、後期まで継続することが明らかになった。しかし、それでもその系譜が後期弥生土器の主体とはならず、結果として土器系統に大きな変換があったことは間違いない。その宮ノ台式、久ヶ原式系土器の終息理由については未だ定見を見ていない。



第４図　弥生時代後期の環濠集落

その後の後期前半になって移植されるかのように成立する東海西部系土器についてはさまざまな見解が提示されている。先に示した綾瀬市神崎遺跡では、器種構成もそのままに95％を占める東海西部系土器のあり方から単なる遺物の移動ではなく、かなりの人数が集団で移動し、そこで生活をしたという想定がなされている。これを裏付けるように、神崎遺跡、本郷遺跡などでは東海西部地域でよく見られる横長長方形の竪穴住居が確認され（註2）、また、本郷遺跡では方形周溝墓出土の焼成前底部穿孔のあり方にも西遠江地方との共通性が指摘されている（註3）。これらは人伝いに移動も可能な物資ではなく、それらを造る人、使う人の存在と切り離すことが困難であることから、直接的な人の移動の痕跡と考えられる。また、相模川流域で東海西部系土器がまとまって出土する集落は例外なく環濠を伴っており、後期前半の環濠集落は三河、西遠江地域との深い関連が想定される（第４図）。

つまり、神奈川県西部地域では、宮ノ台式から久ヶ原式へと続く南関東地域の土器様相とは異なり、後期前半段階に全く別な系統の土器群が介在する。そしてそれは、単なる土器製作技法の伝播にとどまらず、住居形態、土器祭祀、環濠集落等の関連から、移住を含む大規模な人的交流の結果と考えられる。ひいては地域社会の成り立ちそのものに、三河、西遠江といった東海西部地方が深く関与していたとの想定が可能である。

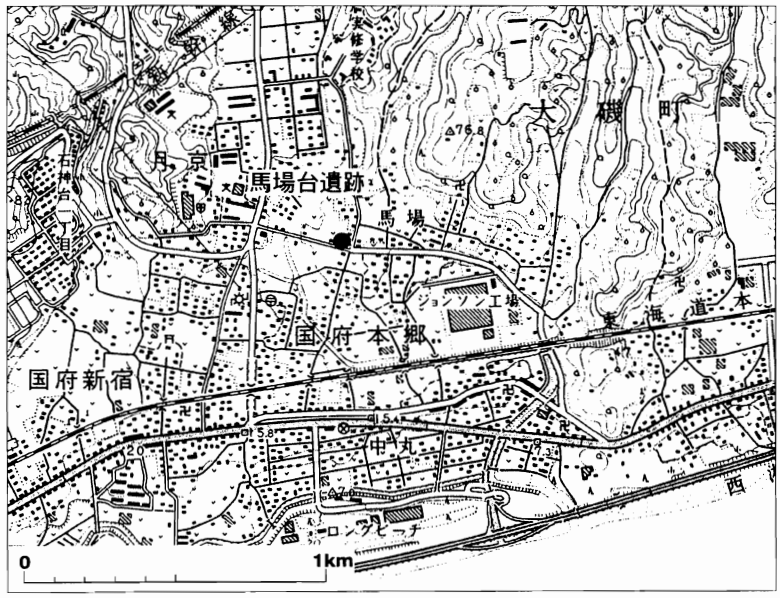
こうした事実によって、関東各地に出現する小地域土器分布圏の並立状態を根拠に閉鎖的な社会と解釈されてきた弥生時代後期が、ダイナミックな文物の移動、人の交流に裏付けられた情報化社会であったことが明らかになったのである。

3．大磯町馬場台遺跡

さて、以上のような前提に立ちながら、新たに確認された大磯町馬場台遺跡の出土土器の意味することについて考えてみよう。

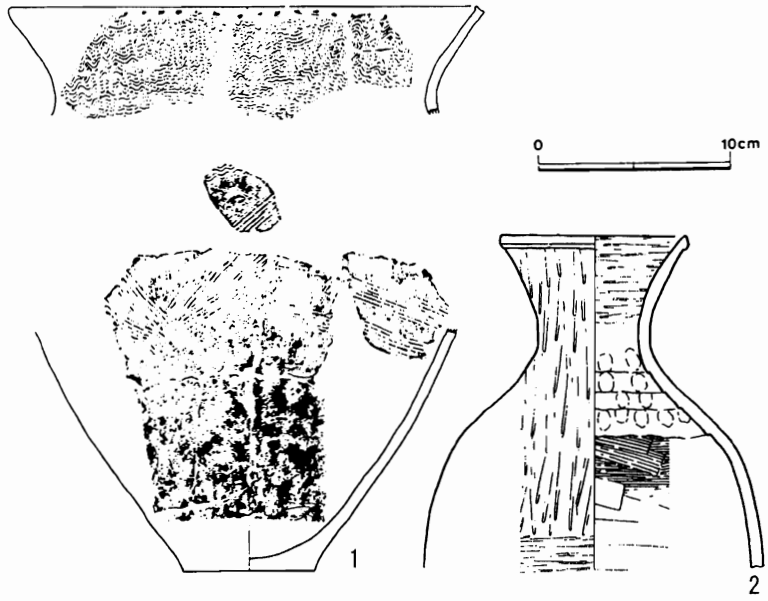
大磯町馬場台遺跡はJR大磯駅から西に2km程、現在の海岸線からは1km程に位置する(第5図)。南流する不動川の左岸、南西に傾斜する比較的平坦な段丘上に立地する。馬場台遺跡自体はほぼ段丘全体に広がっており、東西750m、南北300mの広い範囲にわたっている。このうち、弥生時代の遺物が確認されているのは遺跡の西側、馬場台公園を中心とする東西400m、南北300mの範囲である。

この馬場台遺跡では住宅建設などに伴い、既に40個所以上のこまめな調査が実施されている。各地点で弥生時代後期の遺物が出土し、一部では環濠らしき溝も検出されている。ただし、調査件数は多いもののひとつひとつの規模が小さいため、大規模な集落が広がっているのか、複数の環濠集落が展開しているのかなど、その内容については今後の検討が必要である。



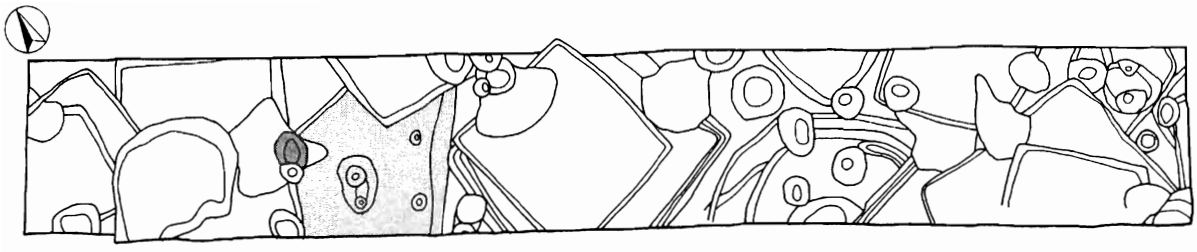
第5図　大磯町馬場台遺跡の位置（1/25000）

このうち、馬場台遺跡第5地点では、住居の床らしき硬化面と炉のまわりから櫛描文をもつ甕が出土している（第6図1）。この甕は破片資料であり、調査当時はさほど関心を集めなかったが、今回第19地点の出土土器が確認されたことで再び注目されることとなった。



第6図　大磯町馬場台遺跡第5地点出土の土器（1/4、註4）

馬場台遺跡第19地点の発掘調査は、道路拡幅に伴い昭和63年に実施されている。108㎡足らずの調査範囲から古代を中心に19軒もの住居址が検出され、重複した遺構の下層から弥生時代後期、中期の住居



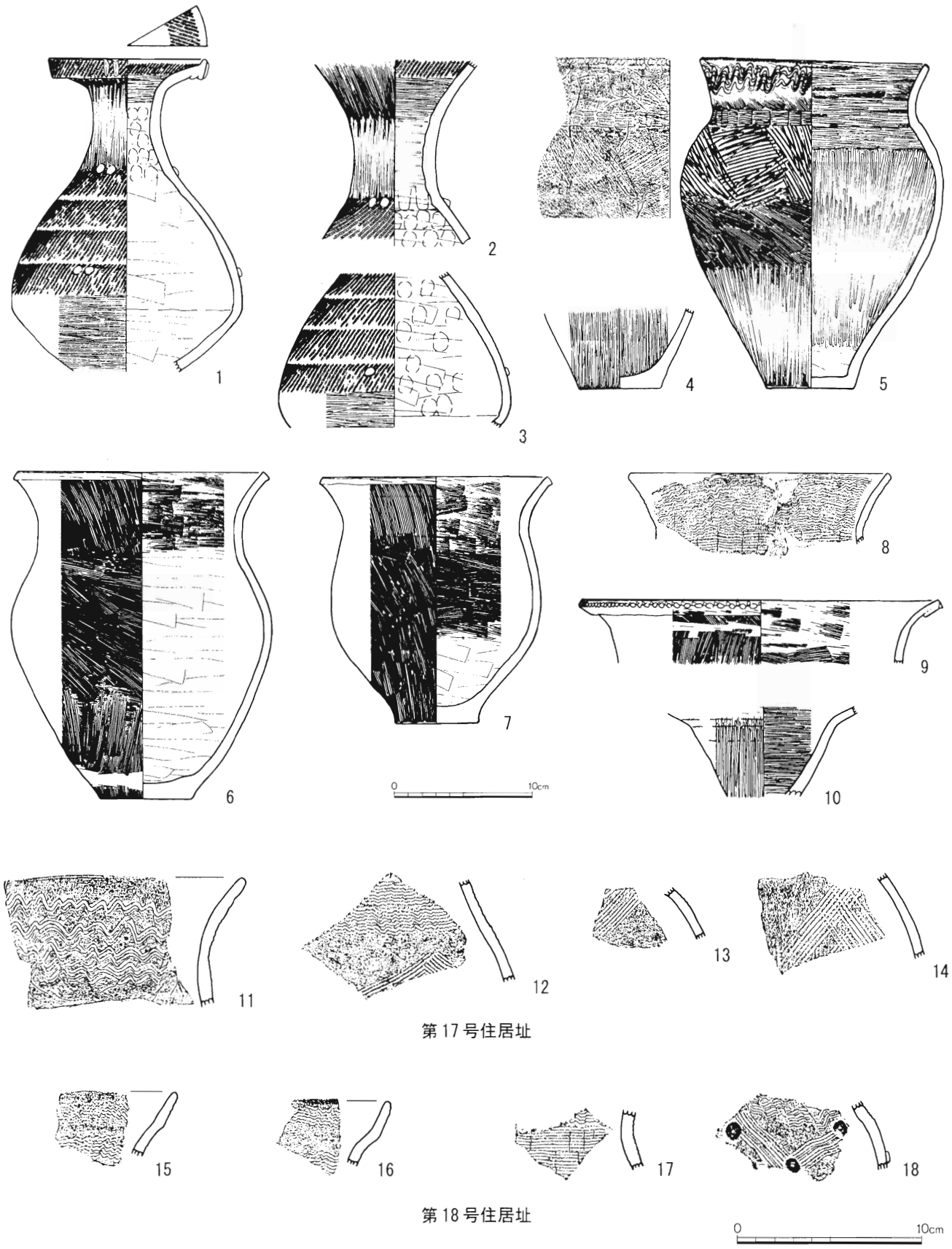
第７図　大磯町馬場台遺跡第19地点の遺構配置図（註５）

址が見つかっている（第７図）。第17号住居址もそうした住居址のひとつであり、壁の一部を確認しただけで全体の形状は不明であるが、部分的に残された住居址の床面上から土器がまとまって出土している。

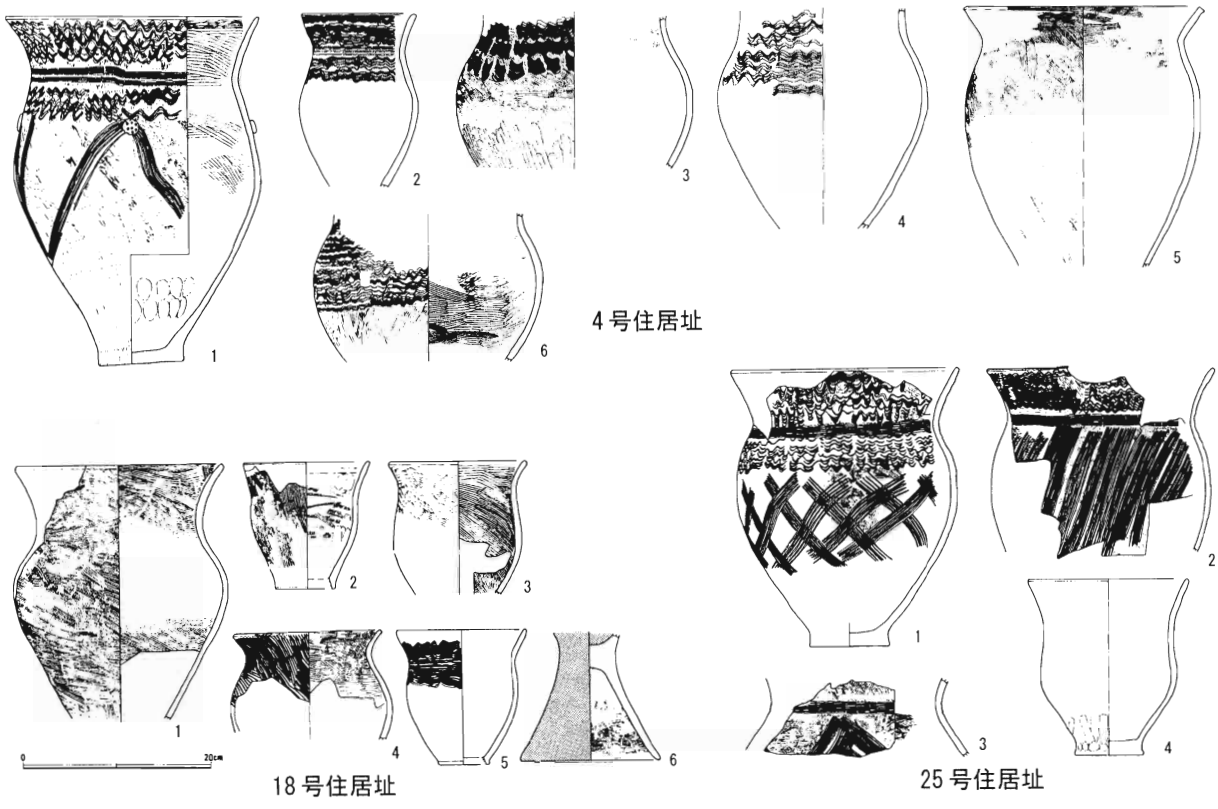
この調査自体は未報告であるが、町史編さん事業の一環でそれらの一部を図化することができた（第８図）。図示した壺はいずれも細頸でなだらかに胴部へと続く。胴上半部には幅の長い無区画の斜縄文が転がされ、胴中位と上位に円形の浮文が添付されている。口縁部は外反し、内面にも斜縄文が施される。1 の壺は口縁端部がわずかに上方へ延び、中期後半の受口状口縁に類似している。一方で、端部外面には薄い粘土帯を貼り付け端面の拡幅を図っており、後期になって一般化する「折り返し口縁」の祖形とも考えられる。甕は三種類ある。4・5・8 は第５地点同様、櫛描文を有する平底甕で、胎土は緻密にしていわゆる金雲母を含む。全体によく磨かれていて焼成も良好である。これらと同様の破片が 11ー14 であり、またこの住居址を切る古墳時代前期の第 18 号住居址からも類似品が出土している（15ー18）。6・7 はハケ調整の平底甕である。無文で調整はハケ、胎土も砂粒が多くざらつく感じである。口縁部の内外面までハケが加えられているが、端面だけはナデで面取りが施されている。9 は口縁部直下に一段の輪積みの段を有し、大きく開く甕の口縁部である。10 は上部と脚部を欠く高坏である。

これらの土器の位置付けについて、系譜と時期を中心にみてみよう。まず、1ー3 の壺についてであるが、これらは細頸で胴部下半に稜をもつ器形、稜までの胴部全面を無区画の斜縄文で覆う文様等に東遠江の菊川式古段階（後期初頭）の特徴がよく表われている。特に１の口縁部のつくりは中期後半と後期の過渡期的特徴とも考えられる。10 の高坏も菊川式の系譜を引いたものである。

次に、三種類の甕についてであるが、第５地点でも出土している櫛描文を有する甕は、小異はあるが、口縁部直下の波状文、くびれ部分の簾状文、そして胴部上半の櫛描斜行文を特徴とする。こうした特徴を有する甕は中部高地、長野県の北部地域に分布が見られる。系譜を考えれば中部高地系ということになろうが、地域的により近い事例では甲府盆地の山梨県金の尾遺跡出土土器を挙げることができる（第９図）。金の尾遺跡は甲府盆地にあって、中部高地系と東海系の土器が混在する興味深い集落遺跡で、その時期は弥生時代後期前半を中心とすると評価されている。第９図に図示した４号住居址の 1、25 号住居址の 1ー3 には器形、文様構成とも馬場台遺跡出土例との共通点を見



第８図　馬場台遺跡第19地点出土土器（1/4・1/3、註５）



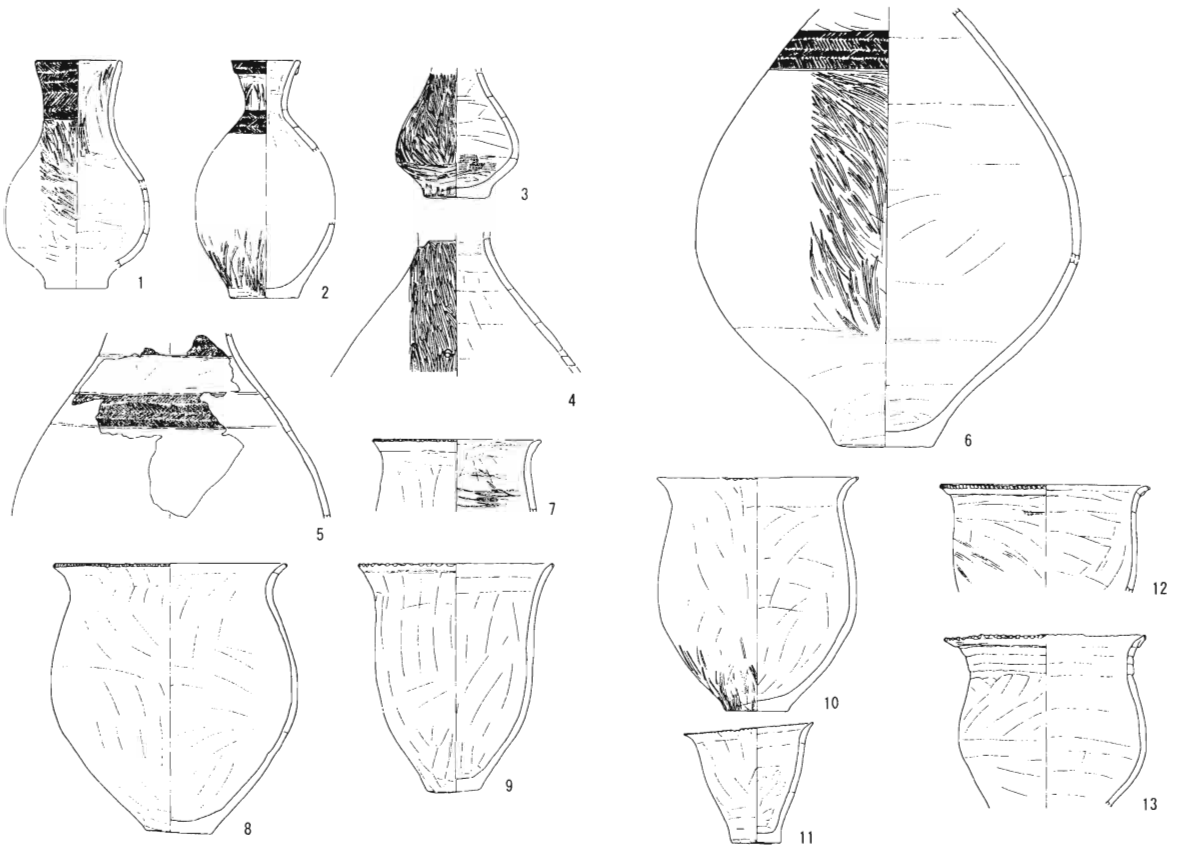
第９図　山梨県金の尾遺跡出土土器（1/8、註６）

い出すことができる。このほか、拓本資料であるが、第８図 15、16 のような受け口状を呈する口縁形態も中部高地の後期古段階に類例が認められる。

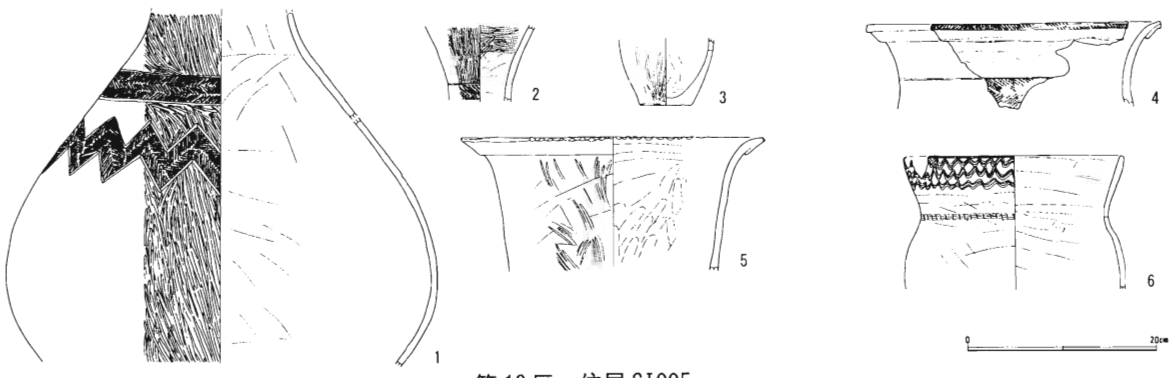
神奈川県西部地域ではこのような櫛描文の甕はこれまで破片では確認されてきた。ただし、古墳時代やそれ以降の遺構から出土したり、共伴資料が不明瞭であったりと位置付けが固定できずにいた。この馬場台遺跡の事例によって、時期的には後期初頭にひとつの定点を持つことが明らかになった。また、その分布は、調査件数が多いこともあって小田原市内が最も多く、10 遺跡から 80 点以上が出土している。そしてその範囲は、大磯町、平塚市の西寄りまでは認められるが、相模川流域での出土は無いようである。今のところ、県の西部にのみ分布すると言っていいだろう。

次の 6・7 の甕は未だ系譜が判然としないが、金の尾遺跡の共伴資料を見ると、４号住居址の 5、18 号住居址の 1〜3 等に似たような器形のハケ調整平底甕を確認することができる。神奈川県内では見ることのないこの種の甕も、櫛描文の甕と同じルートをたどってきた可能性がある。ただし、中部高地にはこうした甕は見られないことから、甲府盆地との関係を示しているのかもしれない。

三つ目の甕、9 は東京湾岸地域の久ヶ原式古段階に比定される。先にも示したとおり、神奈川県西部地域では宮ノ台式土器の後継である久ヶ原式土器の影が薄かったが、近年になってようやく資料が発見されてきた。その代表例が平塚市の真田・北金目遺跡群第 19 区の土器群である（第 10 図）。久ヶ原式特有の沈線区画の縄文帯、山形文を有する大形壺とともに、口縁部直下に一段の輪積みを



第19区　住居SI004



第19区　住居SI005

第10図　真田・北金目遺跡群第19区出土土器（1/8、註7）

有する甕が出土している。SI004の7・12、SI005の5等の一群である。これらの資料はSI004の1・2の壺のからも、久ヶ原式土器の古段階に位置付けられる。また、SI005にはやや崩れてはいるが、櫛描文の甕が共伴しており（6）、馬場台遺跡出土土器を考えるうえでも興味深い。

以上のように、馬場台遺跡第19地点第17号住居址の出土土器には、東遠江、甲府盆地（中部高地）、東京湾岸等と各地の系譜を引く土器が含まれている。そして、それぞれの系譜においての型式学的な検討からは、いずれも後期初頭に置くことができるという。この段階で、何が外来で何が在

来かの判断は難しいが、中期末との関係を重視する限り、当地域においても在来と呼べる土器群は宮ノ台式に継続する久ヶ原式であったということになろうか。

4．馬場台遺跡出土土器の意味

現時点での馬場台遺跡出土土器の評価についてまとめたが、そこから想定される事柄についていくつか考えてみたい。

まず、当地域では幻と言われてきた後期初頭という時期についてである。真田・北金目遺跡群の資料により、当地域にも宮ノ台式の後継たるべき久ヶ原式古段階が存在することが明らかになった。ただし、その段階の社会については、他の遺物や住居、方形周溝墓等の遺構の状況が明らかにならなければならず、実態としては資料の増加を待たざるをえない状況である。よって、ここでは土器のあり方に限って話を進める。

第一に神奈川県西部地域で久ヶ原式古段階に東遠江系土器がもたらされていることを評価しなければならない。南関東地方では弥生時代後期に、ナデ調整・平底甕からハケ調整・台付甕へと変化していくが、そのハケ調整・台付甕への変化の原因となる東海地方系譜の土器群との接触が後期の初頭まで遡る可能性があるということになる。従来考えられてきたように、南関東地方へのハケ調整・台付甕の伝播が東海西部地方の関東への進出の時期であるとするならば、そうした接触は中期段階から継続し、後期になって顕在化したとも考えられる。宮ノ台式、久ヶ原式の後退ことが、その誘因であったのかもしれない。

第二に東海西部地方との関係で言えば、神奈川県西部地域に三河、西遠江からの影響が及ぶ以前に東遠江からの直接的な交流が始まっていたことが明らかになったと言える。つまり、当地域にとって、神崎遺跡を始めとする環濠集落の成立は後期における東海からの影響の第二波の結果であり、別に第一波があったということである。それは、荒川下流域に進出した東遠江系の環濠集落である新宿区下戸塚遺跡や和光市午王山遺跡について、遺存が悪いながらも後期初頭から集落が始まっているとの見解が示されていることとも合致する。当地域にも神崎遺跡よりも古い東遠江系集落の存在が想定されることともなる。

第三に中部高地系土器についてである。これまで、関東地方への中部高地系文物の流入は長野、群馬、埼玉というルートが主に考えられてきた。鶴見川中上流域に分布する朝光寺原式土器についても埼玉県、群馬県との関連で評価されてきた。しかし、馬場台遺跡を始めとする神奈川県西部地域の櫛描文の甕は、その特徴や分布から見ても朝光寺原式土器との直接的な接触は考えにくい。そこで、例示した金の尾遺跡との類似点やハケ調整平底甕の系譜から、甲府盆地の存在がクローズアップされてくる。甲府盆地では後期前半は中部高地、後半は東海の影響が強くなると言われているが、後期前半の金の尾遺跡にも既に駿河、東遠江の影響が認められる。このあたりが馬場台遺跡とよく似た土器様相となっている原因なのであろう。

以上のように、馬場台遺跡は土器だけに限ってもさまざまな情報を提供している。それは本来土器に限らないはずではあるが、先にも述べたとおり、この後期初頭段階の社会についてはこれからの課題とするほかはない。よって、この場では神奈川県西部地域を考えるうえでの今後の足がかりとして、二、三の指摘をするに留めたい。

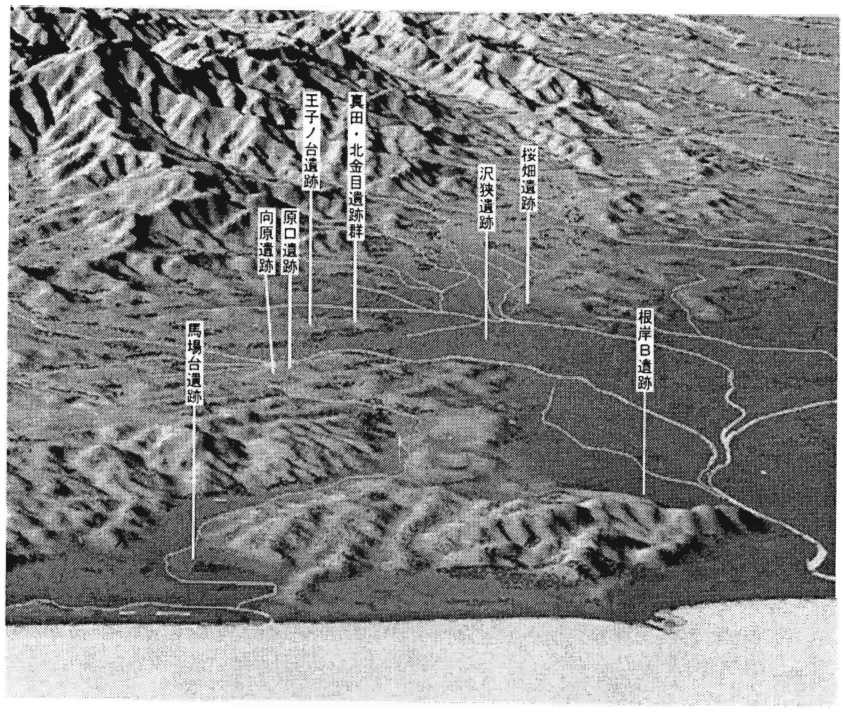
当地域にとって弥生時代後期前半は、三河・西遠江等の東海西部地方からの直接的なヒト、文物、情報の流入により、社会そのものが大きく変動した時代であった。そのため、今までの研究の関心が、大きな影響を及ぼした東海地方へ向いてきたことは否定できない。だからこそ、前提でまとめたように、関東地方の西の玄関口にあたる当地域と東海諸地域との関係が明らかにされてきたのである。しかし、馬場台遺跡の出土土器は、後期初頭において東海西部地方だけではなく、中部高地とも甲府盆地とも東京湾岸とも交流があった可能性を示している。私たちは、現代の地域的なつながりから関東地方と東海地方、そして東海地方の先には近畿地方があることを想定している。さらにより高度な先進的文物はそうしたルートからもたらされるとも思いがちである。しかし、弥生時代後期の文物が近畿地方で一括管理され、その後に各地へ拡散していったとは限らない。例えば、関東地方の方形周溝墓に副葬される鉄剣、銅釧、ガラス玉はいずれも近畿中枢に分布の中心をもたない。むしろ、これらの文物は近年、群馬、長野、北陸、北近畿といった地域との関連が取り沙汰されている。特に神奈川県西部地域にとっては、弥生時代中期以来、中部高地とのつながりは継続していた可能性が高く、そうであれば、今後甲府盆地との関係に注目していく必要があるだろう。甲府盆地と小田原の直接ルートの想定も必要となるかもしれない。

近畿、東海地方からもたらされる情報もあれば、そこを経由しない情報もあった。また、より日常生活に密着した性格の情報は、別のチャンネルのネットワークで行き来していたと考えられる。土器に関する情報は、本来こちらのチャンネルで伝達されていたはずであり、土器から地域間交流を検討する場合には、交流、情報のレベルを意識しておく必要がある。

弥生時代中期と後期には、同じ名で呼ばれる環濠集落や方形周溝墓にも質的に大きな違いが認められる。古くから問われている石器から鉄器への移行も、単に利器の材質の変化にとどまらず、製作から流通ネットワークの大きな変換を伴ったはずである。このように考えると、どうやら、中期から後期への移り変わりは、私たちが思う以上に多角的な地域間交流のもとに、各地の情報が入り乱れ、そのネットワークシステム自体にも大きな変化がもたらされた時代であったらしい。私たちとしては、土器の交流があったから地域間の交流があったとするだけではなく、認識しやすい土器ですらこれだけ複雑な地域間交流があったと考えるべきであろう。

おわりに

馬場台遺跡のわずか18点の土器から話を広げすぎたが、最後に具体的な事象に戻り、まとめとしたい。神奈川県西部地域の弥生時代後期は、これまで主に相模川流域、金目川流域について検討さ



第11図　馬場台遺跡と周辺の弥生遺跡

れてきた。これは、資料的な制約によるところが大きかったわけであるが、断片的には小田原市の千代台地や酒匂川の沖積地にも遺跡の存在が知られている。千代台地では馬場台遺跡と同様の菊川式古段階の壺も採集されており、潜在的に良好な資料が眠っていることがわかっている。それは、小田原市内の多くの調査地点で櫛描文の甕が出土していることからも窺える。今回取り上げた馬場台遺跡もそうした遺跡のひとつであり、中期後半に継続し、後期初頭に遡る環濠集落となる可能性を秘めている。近年の相模川左岸の調査成果でも明らかなように、自然堤防や低位段丘に立地する遺跡の調査から得られる新知見には目を見張るものがある。第11図には馬場台遺跡と金目川流域の弥生時代諸遺跡との位置関係を示したが、久ヶ原式を初めとし菊川式系、雌鹿塚式系など後期の古段階となる土器群を出土している遺跡が点在している。それらと馬場台遺跡は大磯丘陵を南下する不動川で結ばれており、馬場台遺跡もこれらの遺跡群と有機的な関係を持つひとつだったと考えられる。低地、微高地、台地、丘陵等、異なる立地であるからこそのつながりを強調したいと思う。

【註】

註1　立花　実　2007「神奈川の遺跡調査をめぐる30年　弥生時代　神奈川県西部地域を中心とした弥生時代後期の土器研究」『第30回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発病要旨』神奈川県考古学会

註2　飯塚美保　2001「竪穴住居址の平面形態」『シンポジウム　弥生時代のヒトの移動　資料集』西相模考古学研究会

註3　池田　治　1997「海老名本郷遺跡の集落変遷について」『西相模考古』第6号　西相模考古学研究会

註4　鈴木一男　1981『馬場台遺跡』大磯町文化財調査報告書第21集　大磯町教育委員会

註5　立花　実　2006「大磯町馬場台遺跡出土の甕形土器について」『大磯町史研究』第13号　大磯町

立花　実　2007「弥生時代後期の社会」『大磯町史』10別編考古　大磯町

註6　末木　健他　1987『金の尾遺跡　無名墳（きつね塚）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第25集　山梨県教育委員会・日本道路公団

註7　河合英夫他　2003『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書』4　平塚市真田・北金目遺跡調査会

弥生後期の大阪と横浜北部

中川 二美

はじめに

大阪府下、特に河内地域の弥生時代後期の地域様相については、まだまだ未解明の部分が多い。その一つに、土地開発の盛んであった沖積平野に立地する集落が減少することが挙げられる。また、時間軸のもととなる土器研究においても、良好な一括資料に恵まれないことから、編年研究の積み重ねが少なく、十分に集落動態を検討しきれていない。今回は、そのような状況の大阪府の弥生中期から後期への変化と後期社会の様相について検討を行ってみたいと思う。

また今回は同時に、横浜市北部の遺跡群の検討という課題も与えられている。これについては、大阪の様相との比較という方法で、両者の相違点を導きだし、問題提起の一助となればよいと考えている。

Ⅰ．大阪における弥生時代後期社会

1．集落動向

（1）高地性集落の出現・増加

弥生後期の大阪府下の遺跡は、中期までの様相とは異なるものへと変化する。まず、低地に多くみられた規模の大きい遺跡が減少し、「高地性集落」と呼ばれる比較的高い土地に作られる集落が増加する傾向がみとめられる。

例）観音寺遺跡

古曽部・芝谷遺跡

（2）環濠集落の減少・消滅

中期の比較的大規模な集落のほとんどは環濠をもつ集落である。これが後期になると大規模な集落が減少、消滅する。しかし、少数ではあるがとして環濠をもつ集落も継続する。

例）亀井遺跡

（3）集落の内容の変化

弥生後期のこの集落立地の変化には、集落を構

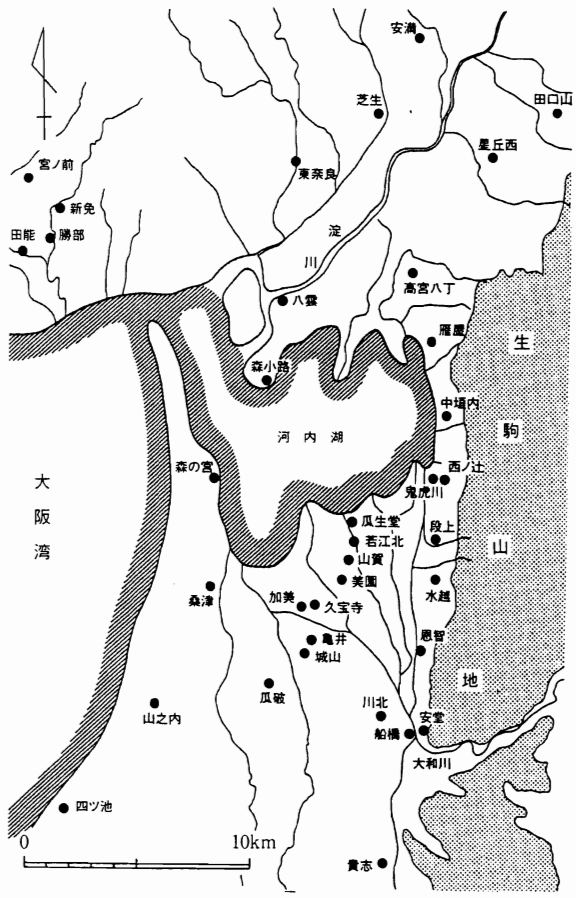


図1　河内湖周辺の主要弥生遺跡

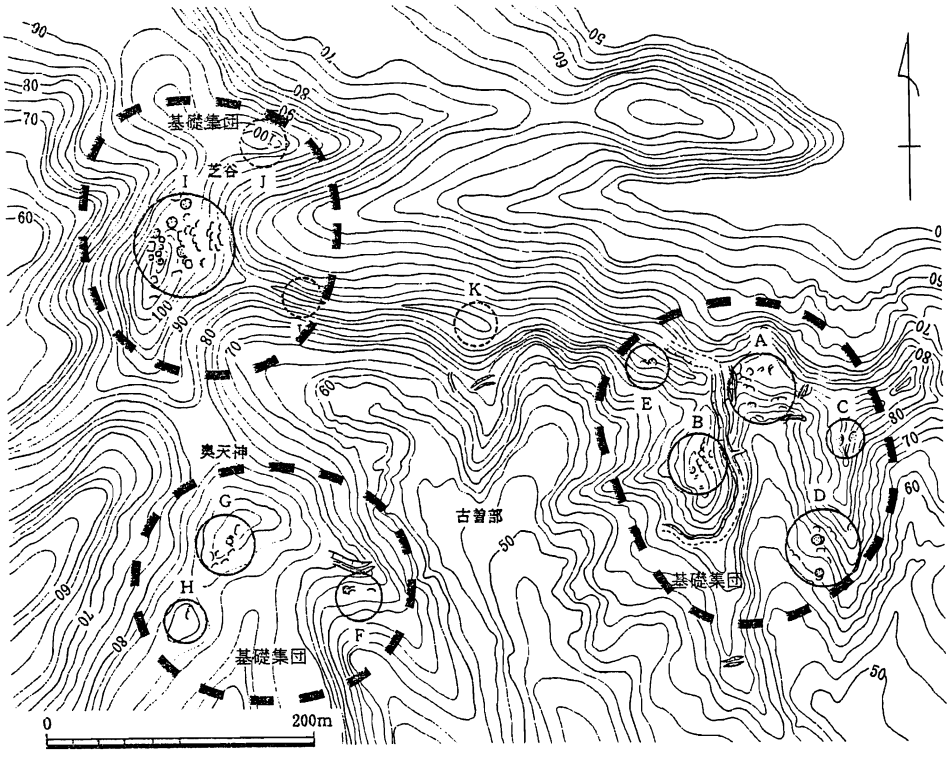


図２　古曽部・芝谷遺跡（若林 2007 より）

成する人間集団の要素の変化が背景にあるとの意見もある（若林 2007）。中期の環濠集落と比較して、比較的規模が小さいと思われる集落が増加する傾向も認められる。

２．土器の移動

（１）隣接地域での土器の移動

大阪府下の弥生時代の遺跡から見付かる土器の胎土は、大きく２種類に分けられる。

・暗褐色の胎土で、角閃石を特徴的に含むもの。

・白っぽい胎土のもの。

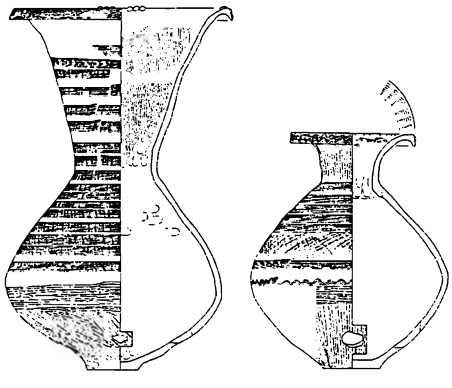


図３　生駒西麓型（左）と畿内通有型（右）

これら２種類の胎土の差と、土器の器形・製作技法には相関関係が認められる。これは、大阪府下における土器生産地の違いを示していると考えられる。・はその分布域から「生駒西麓産」土器と呼ばれ、・は「低地」の土器と呼び分けられることが多い。今回は、前者を「生駒西麓型」、後者を「畿内通有型」と呼びたい。

これら肉眼観察で胎土の区別が可能な土

器の特質を活かして、河内地域を中心に、異なる胎土の土器の割合の検討を行った。また、集落立地の粗密などにより、生駒山側（河内湖東岸遺跡群）の遺跡では鬼虎川遺跡、西ノ辻遺跡などを、低地側では後期まで集落が継続する亀井遺跡を代表させて分析を行った。河内湖東岸遺跡群は生駒西麓型の産地となる。

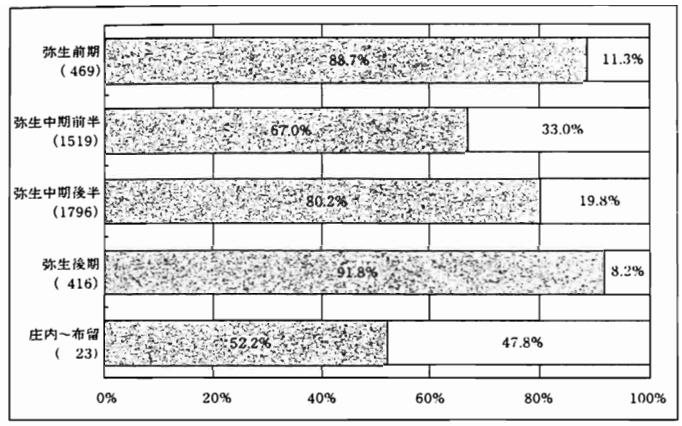
両者のデータを比較すると、中期で非地元産の土器の比率が高くなるが、前期と後期では地元産の土器が９０％前後と圧倒的な差がある。つまり、前期や後期では、近接する地域でも土器が持ち運ばれるような集落間の交流が少なかったといえる。

また、これらを貯蔵（壺形）、供膳（高坏など）、煮沸（甕形）というように器種別での比率をみると（図５）、貯蔵・供膳器種に比較的非地元産の持ち込みが多い傾向も見受けられる。

（２）遠隔地からの土器の移動

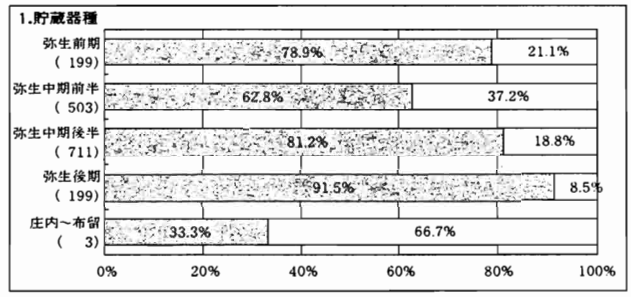
弥生時代後期の大阪府内で確認されている遠隔地からの土器の持ち込みは、多くが瀬戸内沿岸地域のものである。瓜生堂遺跡の例などを挙げると、現在の香川県からのものや、広島県付近からの土器も確認されている。他に大阪よりも東側の地域の土器としては、滋賀県の土器などが確認できる。

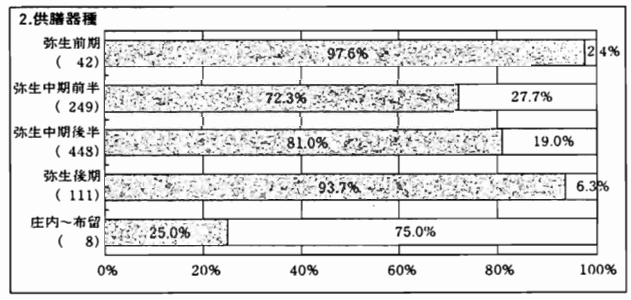
これら遠隔地から持ち込まれた土器の絶対数は出土する土器全体にすれば非常に低い比率である。しかし、当時の大阪は、瀬戸内地域などより西側の地域とのつながりが強い地域と考えられる。

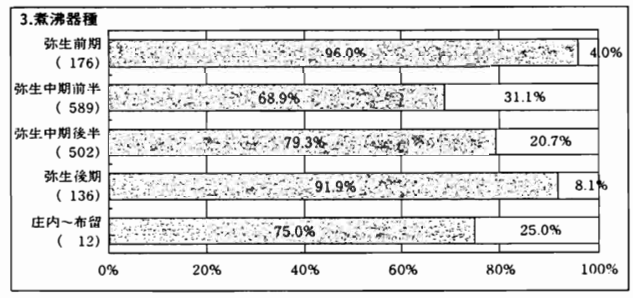


トーン：生駒山西麓産(在産地)、（　）内数字：集計個体数

図４　河内湖東岸部遺跡群における生駒山西麓産土器の消長－１（全器種別）



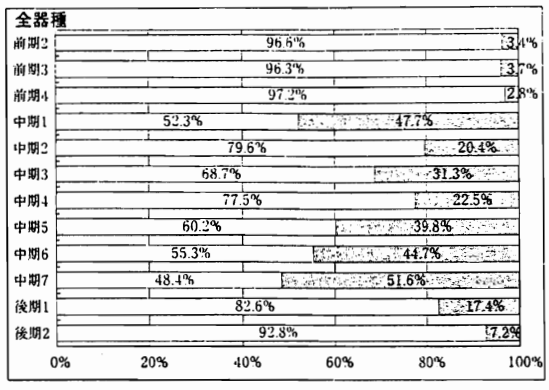




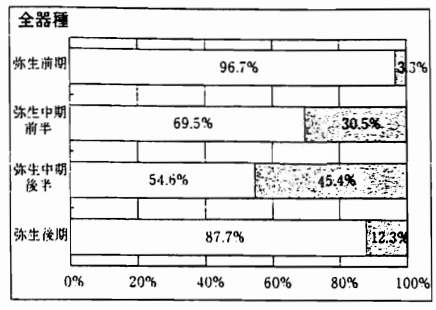
トーン：生駒山西麓産(在産地)、（　）内数字：集計個体数

図５　河内湖東岸部遺跡群における生駒山西麓産土器の消長－２（機能別）

A：亀井遺跡編年区分



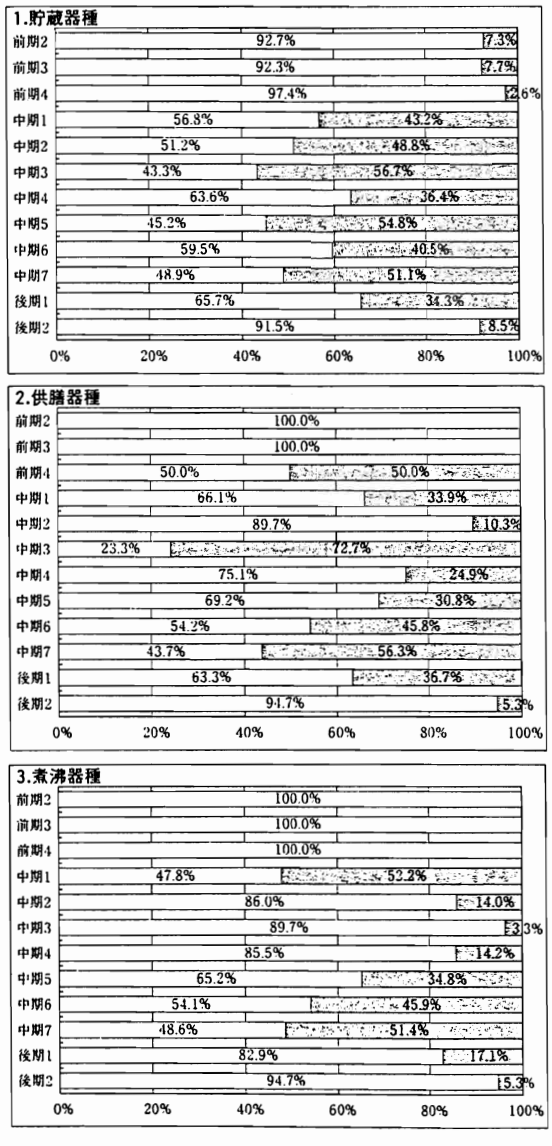
B：大別時期区分



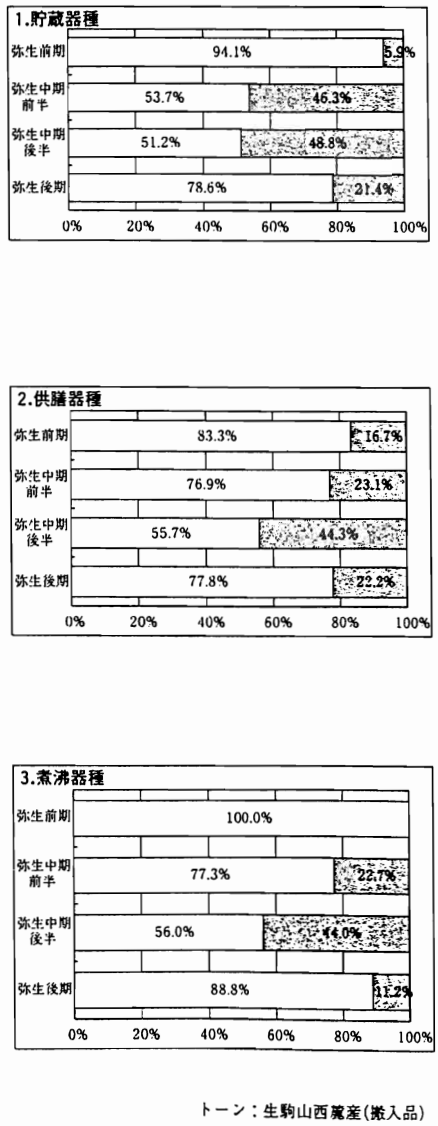
トーン：生駒山西麓産(搬入品)

図6　亀井遺跡における生駒山西麓産土器の消長－1（全器種別）

A：亀井遺跡編年区分



B：大別時期区分



トーン：生駒山西麓産(搬入品)

図7　亀井遺跡における生駒山西麓産土器の消長－2（機能別）

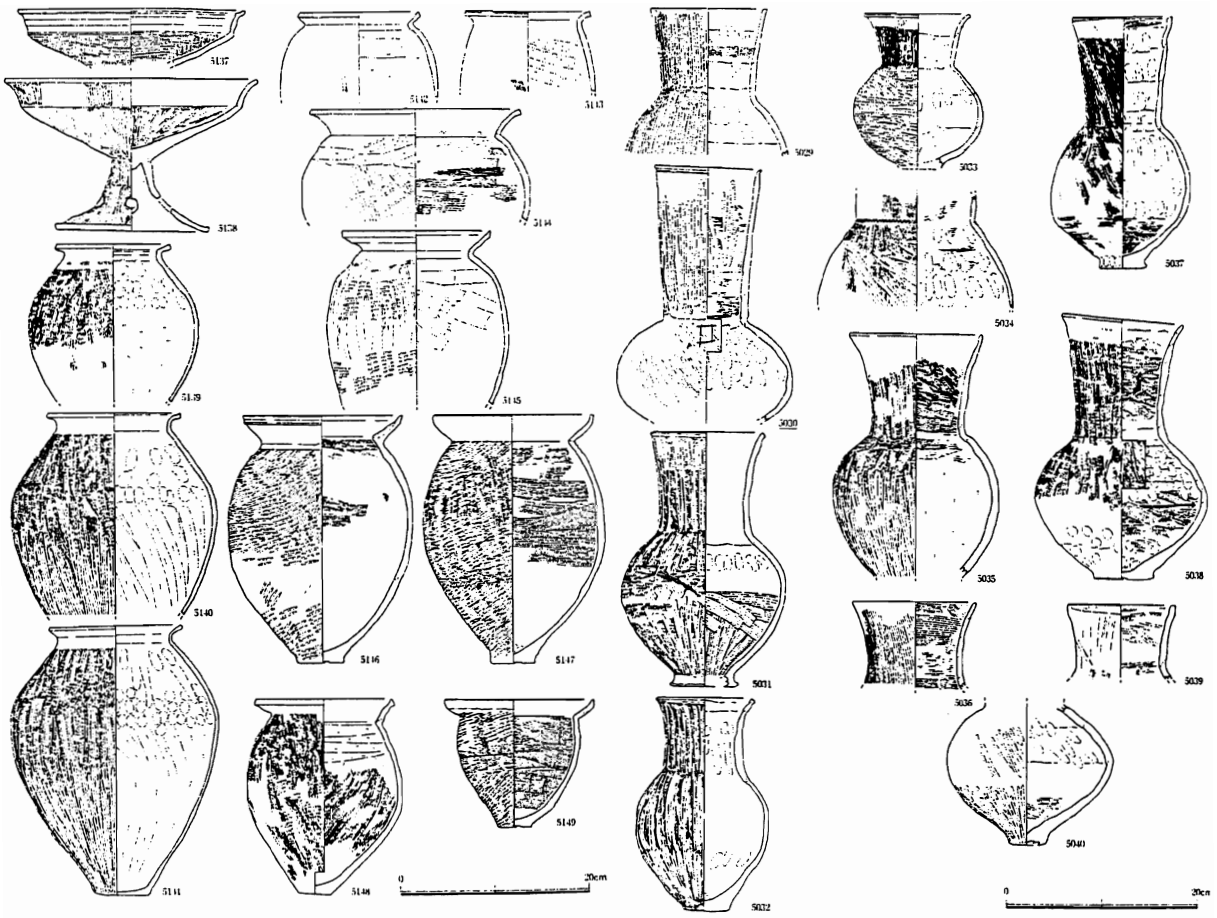
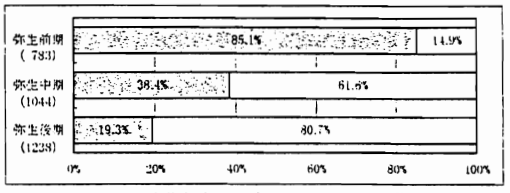
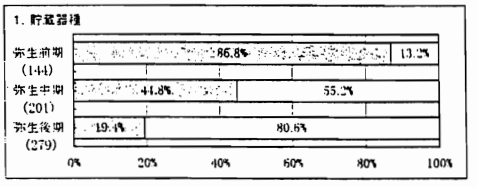


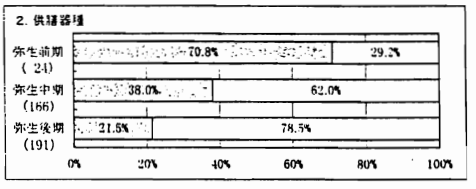
図８　瓜生堂遺跡出土弥生時代後期の土器群

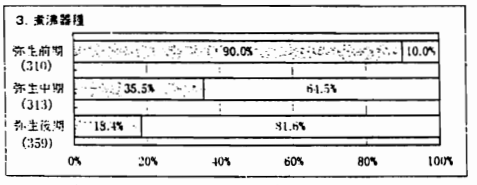


トーン：生駒山西麓産、（　）内数字：集計個体数

図９　瓜生堂遺跡における生駒山西麓産比率の消長－１（全器種別）







トーン：生駒山西麓産、（　）内数字：集計個体数

図１０　瓜生堂遺跡における生駒山西麓産比率の消長－２（機能別）

３．小結

大阪では低地に多くの大規模集落が営まれた中期では土器の移動が示すように、集落同士、地域同士の人の行き来が活発であったと考えられる。しかし、後期になり低地での集落が減少し、高地性集落が増加する時期になると土器の移動が減少する。

土器も、中期までの土器の製作技法などが大きく変化する。これは生駒西麓型を地元産とする地域もその他の地域も同様である。土器の移動自体は少なくなるが、このような土器の形や製作技法の変化などは隣接地域で大差はない。つまり、土器の移動から読みとれる地域間の交流は減少傾向にあるが、土器からは読みとれない交流は存在していたといえる。

また、瓜生堂遺跡の生駒西麓型と畿内通有型の土器の比率変化から、前期と後期で地元産とする土器が変化している集落も認められ、同じ遺跡でも時期によって変化のある例もみとめられる。

また、滋賀県より東の地域とのつながりはほとんど確認できない。

Ⅱ．横浜市北部における弥生時代後期社会

１．環濠集落の減少と小規模化

横浜市北部では、今までに明らかにされているように、中期後半に多数の住居をもつ環濠集落や環濠を持たない小規模な集落が丘陵上に数多く営まれる。後期になると集落数自体に大きな変動はないものの、全体的に規模の小さい集落が増加する。

例）大塚･歳勝土遺跡

２．土器の変化

横浜市北部では、大きく二つの系統の土器が存在することは従来から示されている。これらの土器は、互いに隔絶して存在するのではなく、同じ集落の中に同時に存在していたと考えられる。ただし、一つの集落に存在する両者の比率は、集落によって異なっているようである。

例）四枚畑遺跡

Ⅲ．まとめ

大阪（河内地域）と横浜市北部は、中期から後期への移り変わりの背景が全く異なる様相を呈しているため、単純に比較検討を行うことは難しい。河内地方では横浜市北部地域のように明らかに系統のことなる集団の流入は考えにくい。

しかし、朝光寺原式土器は破片であっても久ヶ原式土器やその他の土器との判別が比較的行いやすいことを利用し、集落ごとの胎土比率を求めることにより集落間の土器の供給について具体的な様相を明らかにできるのではないかと考えられる。

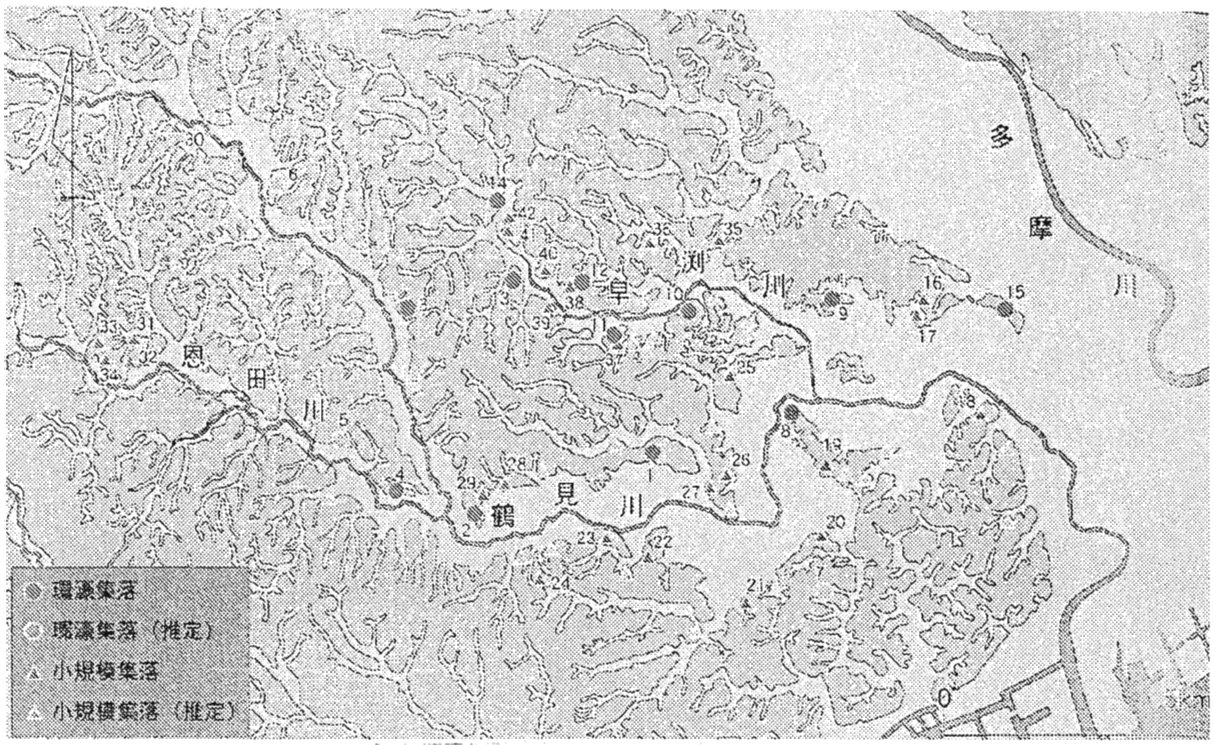


図１１　弥生時代中期後半の集落分布図

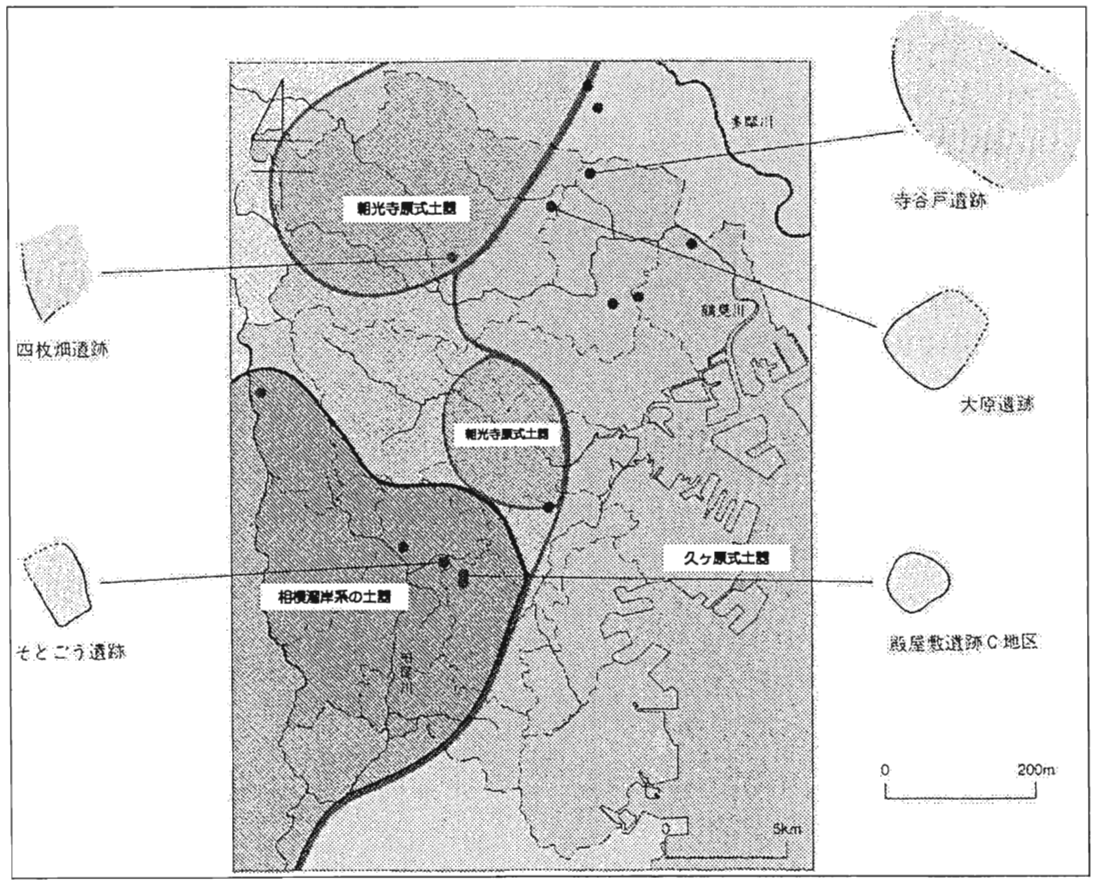


図１２　横浜市における弥生後期の土器分布

横浜市日吉台遺跡群

安藤 広道

1．日吉台遺跡群とは

「日吉台」は、東急東横線日吉駅の東、現在、慶應義塾大学日吉キャンパスのある高台の通称である。ただ、この名称がいつから用いられ、本来、どの場所を指すものであったのかはよくわかっていない。日吉台は、下末吉台地の北半部、多摩川と鶴見川によって形成された広大な沖積低地に、東に向かって突き出す台地の東端にあたっており（第１図）、北には多摩川の氾濫原を挟んで久ヶ原～多摩川台あたりの武蔵野台地を、東には東京湾から遠く房総半島を、さらに西には丹沢山地と富士山を臨むことのできる、眺望のきいた場所である。この一帯には、日吉駅の西側の台地平坦面より一段高くなった、標高35～40mの下末吉面が、南北１ｋｍ、東西700mほどの範囲に島状に残っており、そこに大小の谷が入り込むことで、独立丘陵状の平坦面や、緩急さまざまな斜面、テラス等が形成されている。鶴見川下流域の台地としては、比較的複雑な地形を呈した場所といっていい。

日吉台には、戦前より、広い範囲に先史時代の遺跡が存在することが知られていた。台地の平坦面には、弥生時代・古墳時代の遺構群が全面に分布し、斜面には未知のものも含め、多数の横穴墓群が形成されていたものと考えられている。ただ、これら日吉台に存在する遺跡には、これまでの調査・研究のなかで、必ずしも固定された名称が与えられてきたわけではない。一方、広大な日吉台に展開する遺跡は、地形的にみて、幾つかの単位に分けることが可能である。そのため、私は、日吉台全体の遺跡名としては、「日吉台遺跡群」という名称を用い、台地平坦面、テラスごとに、便宜的にＡ～Ｍのアルファベットをふり、地区名称とすることにしている（第２図）。もちろん、この地区区分は暫定的なものであり、今後は、まだ整理の進んでいない横穴墓群の展開する斜面部を加え、改めて全体の地区名称を整理していかなければならないと考えている。

2．日吉台における考古学的調査の略史

日吉台における本格的な考古学的調査は、慶應義塾の日吉キャンパス建設を契機として、1930年から開始された。調査は、台地上に点在していた円墳群からスタートするが、台地上の地均しや建物の建設工事が進行した 1932 年以降、各所から次々と弥生時代の遺物・遺構が発見され始めると、こちらに調査の主眼が置かれるようになっていった。早くも 1932 年には、日吉台の中央一帯（Ｃ地区）と現在の日吉駅付近（Ｂ地区）において見つかった、８軒の竪穴住居址の発掘が行われている（橋本 1934）。これが、日吉台における、記念すべき最初の弥生時代の竪穴住居址の発掘である。

その後、開発は日吉台の南半にも及び、1936 年には、キャンパス南部のＴ字状に台地が分かれる付け根の平坦面（Ｋ地区）において、多数の竪穴住居址が発見され、うち７軒の発掘が行われた（西

岡 1940)。なかでも、完全なかたちで残っていた1軒（111号住居址）は、長径9.4mに及ぶ大型のものであり、当時における全国最大級の弥生時代の竪穴住居址として、連日多くの見学者で賑わったといわれている。その学術的な重要性を鑑み、この大型の住居址を含む5軒が、遺構面をコンクリートによって保護したうえで保存されることになった。これらの住居址は、もちろん現在も見学が可能である。なお、この調査の報告に付された地図（第3図）によると、1940年までに、日吉台南端の寄宿舎のある台地（L地区、諏訪下北遺跡）から日吉駅一帯（B地区）にいたる広い範囲において、合計41軒にも及ぶ弥生時代の竪穴住居址が発見されていたことがわかる。

さらに、1940年には、日吉台北部の台地上（A地区）において、仮校舎建設の地均し工事の際に多数の弥生時代の竪穴住居址が発見され、そのうち10軒の発掘が行われた（清水 1943)。日吉台において、竪穴住居址群が広く面的に捉えられた最初の調査であり、ここでも比較的大型の住居址の存在が注目されている。なお、論文等にはならなかったものの、この調査の際に、土器の時期によって住居の形態が変化することがはじめて明らかになったと、後に回想されている(清水 1955)。

以上のように、戦前においては、文化財保護の法的後ろ盾がないなかでも、慶應義塾の考古学関係者が日吉台の遺跡の学術的・教育的重要性を認識し、進んでいく工事に合わせて調査を行っていたことがわかる。こうした地道な調査によって、戦前の日吉台は、全国でも有数の規模をもつ弥生時代の集落遺跡として、多くの注目を集めることになったのである。

ところが、戦後になると、日吉台をめぐる考古学的調査・研究は、大きく後退をしてしまうことになる。空襲によって多くの建物を失った日吉キャンパスでは、米軍の接収が終了した1949年以降になって、本格的な復興が始まった。以後、キャンパス内には、次々と校舎や諸施設が建設されていくが、そこで行われた工事では、建物の完成を優先したためか、遺跡の存在がほとんど顧みられなくなってしまったのである。1960年に、C地区の北東端部において竪穴住居址の残欠が発掘されたり（清水 1961)、1961年にJ地区南斜面で横穴墓が（広瀬 1961)、1962年にI地区で縄文時代前期と弥生時代後期の貝塚などが調査されているものの、これらも残念ながら充分な成果報告にまでは至っていない。こうして、日吉台の遺跡の存在は、慶應義塾内部の考古学関係者を含めて、次第に意識されなくなっていったのである。

その結果、日吉キャンパス内では、2000・2001年に行われた大規模な建設工事ですら、埋蔵文化財への対応が一切なされることなく進められたように、何十年もの間、埋蔵文化財を無視した工事が行われるという、異常な事態が続いてしまうことになった。次項に述べるように、2006年になって、ようやくこの異常事態に歯止めがかかったが、近年の聞き取りによって、1970年代以降、実に数年前まで、工事に際して何度も竪穴住居址が確認されていたことが明らかになってきており、また、2006年以降の発掘調査の成果をみても、たいへん遺憾ながら、この間に膨大な量の貴重な考古学資料が失われたことは間違いない。

なお、キャンパスの外にあたる、日吉台南端に位置する独立丘陵状と舌状を呈する台地では、1983

～1984年と1986～1987年に、開発に伴う発掘調査が行われ（諏訪下遺跡、諏訪下北遺跡）、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居址が、それぞれ40軒、36軒調査されている（水野・近藤1984、諏訪下北遺跡発掘調査団1990）。これらの遺跡も、M地区、L地区として、日吉台遺跡群に含めておくことにする。

3．2006年以降の発掘調査の概要

筆者らは、数年前より日吉キャンパス内の踏査を行っており、キャンパス内に弥生時代・古墳時代の遺構がまだ広く残存している可能性を想定していた。そんな折、2006年になって、ここでいうA地区、現在の第4校舎や第5校舎と呼ばれる校舎群が建ち並ぶ台地上に、新たな校舎を建設する計画が発表された。新校舎の建設予定地は、1931年に調査された日吉台1号墳、1940年調査の竪穴住居址群と一部重なり、かつ筆者らが遺構の残存を想定していた場所を含んでいたため、慶應義塾及び横浜市教育委員会に対し、予定地内に埋蔵文化財が存在する可能性があること、そして早急に確認調査をする必要があることを数度にわたり伝えていた。その後、9月に横浜市教育委員会による試掘が行われるようになったことを知り、筆者も試掘に立ち合わせてもらうことにした。

試掘では、遺構は検出されず、さらに試掘地点がハードローム層近くまで削平されていることも明らかになったため、教育委員会は、工事時において発見された場合を除き、埋蔵文化財の保護措置の必要なしとの結論を出すことになった。これに対し、筆者らは、過去の記録や試掘結果からみて、事業範囲内における遺構存在の可能性は否定できないと考え、11月に学術調査として、事業範囲内を中心に30ヶ所のトレンチを掘削した。その結果、弥生時代～古墳時代の竪穴住居址が複数確認されたため、慶應義塾、横浜市教育委員会と協議し、事業範囲内における記録保存を目的とした発掘調査を実施することにしたのである。

調査は、事業範囲約5,000㎡のうち、すでに校舎によって壊されている場所等を除く約1,500㎡を対象とし、2007年3月～5月に実施した。その結果、調査範囲全体から、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居址13軒を含む、多数の遺構が検出された（第4図）。住居址の大半は、校舎や地下のインフラ等により、少なからぬ破壊を受けていたものの、調査区南部においては、長軸11.7mに達する大型の住居址が、ほぼ完全なかたちで検出された（写真1）。この調査によって、1940年に確認された竪穴住居跡群と合わせ、A地区における弥生時代後期～古墳時代前期の集落址の様相が明確になってきたことになる。

その後、C地区の北東部で行われた別の建物の建設工事に際しても、6月に500㎡程度の発掘調査を行った。この地点は、1960年に竪穴住居址が調査された場所の隣接地にあたる。調査区内からは、遺存状態が悪かったこともあり、竪穴住居址の存在は確認できなかったが、住居内の貯蔵穴の可能性がある古墳時代前期の土壙を検出した。

続く7月には、日吉台東部のH地区で行われた、アメリカンフットボールグラウンドの排水施設

の敷設工事に立会い、この地区の遺構の残存状況を確認した。グラウンド全体に縦横に掘削された、幅、深さ 50 ㎝程度の溝を観察した結果、かつてこの地に存在していた、日吉台２号墳の周壕の残骸をはじめ、弥生時代後期の竪穴住居址１軒、新たな円墳の周壕１～２基、その他、性格の特定できない複数の遺構の存在を確認することができた。この調査によって、これまで様相がほとんどわからなかったＨ地区にも、弥生時代後期の集落址が展開していることが明らかになった。

さらに、11 月には、Ｃ地区西側一帯、及びＬ地区に、それぞれ数ヶ所のトレンチを入れ、遺構の残存状況を確認することにした。この調査では、Ｃ地区の西側が厚い盛土によって覆われており、その下に遺構が良好な状態で残っている可能性が高いこと、現在の日吉記念館の前の芝生広場では、芝生を剥がすだけで、竪穴住居址が確認できることなどが明らかになった（写真２）。一方、Ｌ地区では、旧地形が大きく改変されており、遺構の残されている場所が非常に限られていることが確認された。

2008 年に入り、筆者らは、現在、Ａ地区の南、Ｂ地区へと下る緩斜面の発掘を行っている。まだ調査は途上であるが、この緩斜面では、今のところ弥生時代・古墳時代の遺構は確認されていない。

４．日吉台遺跡群の弥生時代～古墳時代前期集落の様相

以下では、戦前を含むこれまでの調査で判明した、日吉台における弥生時代～古墳時代前期の集落の様相についてまとめておきたいと思う。

弥生時代の日吉台における、最初の生活の痕跡は、前期末～中期初頭に遡る。2007 年のＡ地区の調査で、この時期の条痕文土器の破片が１点出土した。その後、中期後葉の宮ノ台式期になると、Ｌ地区とした諏訪下北遺跡の西端で、竪穴住居址が１軒検出されている。ただし、今のところ、他の地区でも明確な宮ノ台式土器は出土しておらず、この時期までの日吉台における居住活動は非常に弱々しいものであったことがうかがわれる。日吉台の北に位置する矢上台では、宮ノ台式土器が比較的まとまって出土しており、地形的にみても規模の大きな集落の存在が想定できるが、日吉台における本格的な集落の形成は、後期からのことと考えてよさそうである。

弥生時代後期を、初頭・前葉・中葉・後葉・終末の５つの時期に分けた場合、日吉台の後期集落は、初頭、もしくは遅くとも前葉には始まっていたと考えることができる。今のところ、この時期の竪穴住居址を特定することは困難であるが、Ｋ地区、Ｌ地区など、日吉台南部の眼下に鶴見川の氾濫原を臨む場所に、前葉までの土器破片がまとまる傾向があるようである。この一帯は、他の地区に比して竪穴住居址の密度が高いように見えることからしても、この辺りに、最初の集落が形成された可能性は高い。

その後、後期中葉～後葉には、Ｈ地区、Ｃ地区を含む、日吉台の広い範囲に集落が拡大し、終末期には、Ａ地区を含む日吉台全体に居住域が拡がったようである。Ａ地区については、1940 年の調査で、複数の小判型の住居址が見つかっているため、集落の展開が後葉以前に遡る可能性もあるが、

日吉台全体としては、基本的に南部の鶴見川の氾濫原に面した場所から始まり、次第に北東方向へと集落が拡大していったと理解して大過はないと考えている。

現在、古墳時代前期の始まりの理解は多様であるが、仮に廻間Ⅲ式や布留０式の成立時期あたりと並行させるのであれば、日吉台の集落は、古墳時代前期の初頭まで、その規模を保ったまま継続したと表現することが可能である。しかし、これまでのところ、日吉台全体を見渡しても、五領式後半に下る土器が全く出土していないことから、集落は廻間Ⅲ式に併行する時期のうちに急速に衰退し、終焉を迎えたものと考えられる。以後、日吉台が、人々の居住域になることは少なかったようであり、これまでのところ、古墳時代中期以降の竪穴住居址は、一例も発見されていない。

さて、各時期の集落の具体的な内容については、調査がきわめて断片的であることもあり、不明な点が多い。しかし、これまでの各地区で発見・調査された竪穴住居址のあり方を見る限り、南端のＬ地区、Ｍ地区等を除き、比較的竪穴住居址間の重複事例が少ない点を指摘することはできると考えている。もちろん、Ａ地区などでは、柱穴をもたない小規模な竪穴住居址の多くが、調査時点ですでに失われている可能性もあるが、全体としてみれば、広大な居住域に竪穴住居が散在するという、後期集落の通有のあり方を、日吉台でも想定することはできそうである。

各地区の集落のあり方の細かな比較も、現状では難しい。ただし、Ｌ地区とＡ地区で検出されている、大型の住居址の存在は、日吉台の弥生時代後期～古墳時代前期の集落の大きな特徴といえるものである。

日吉台遺跡群は、先述のように、戦前に調査されたＫ地区の 111 号住居址が、当時、弥生時代最大級の竪穴住居址として注目されたという学史をもつが、現在では、この 111 号住居址をはるかに凌駕する大規模な竪穴住居址が、Ｌ地区で２軒、Ａ地区で１軒検出されている。Ｌ地区の諏訪下北遺跡 10 号住居址は、小判型を呈し、長径 12mの規模をもつ。出土遺物は少ないが、後期後葉のものと考えられる。もう一例の 19 号住居址は、１辺 10.7mの方形を呈すると考えられる住居址である。こちらは、遺存状態が悪く、柱穴も明確でないため、住居以外の施設である可能性もある。時期は、古墳時代前期前半とみてよさそうである。最後のＡ地区の例は、2007 年の調査で検出されたもので、長径 11.7m、短径 9.6mの長方形を呈する住居址である。この時期の住居址としては、特異ともいえる大型の柱穴をもつ。出土遺物が少ないため、時期の特定には苦慮しているところであるが、今のところは廻間Ⅱ式後半に並行する時期に構築されたものと推定している。

こうした大型の住居址が、日吉台遺跡群の各地区に存在したのか、あるいはある時期のある特定の地区のみに存在していたのかは、今のところよくわからない。ただし、多摩川南岸域、鶴見川流域の弥生時代後期の集落遺跡では、小規模な集落がこれら以上の規模の住居をもつことが多い朝光寺原式期の事例を除くと、同等の規模をもつ住居址は検出されていない。そこに、これら大型の住居の意味を解く重要なカギがあるように思っているが、この点については、次項の周辺の遺跡との関係のなかで触れることにしたい。

5．周辺の遺跡との関係

日吉台遺跡群のある多摩川南岸域、鶴見川流域では、中期後葉と後期とで、集落群のあり方に大きな変化が認められる。中期後葉では、鶴見川中流域を中心に、等規模的・等質的な環濠集落が点在するのに対し、後期では、鶴見川下流域と多摩川下流域に規模の大きな集落が集中的に形成される。中期後葉の環濠集落が、集落周辺の生産性よりも、同じ規模・内容の集落を形成することにこだわっている一方で、後期では、周辺の生産性や台地の広さなどに応じて、集落の規模やかたちを柔軟に変化させているということである。つまり、簡単にいうと、後期では、眼下に広い水田可耕地をもつ広い台地平坦面に、人口が集中し、大規模な集落が形成されていたわけである（安藤・津村 2006）。

日吉台遺跡群に展開した、大規模な弥生時代後期の集落も、こうした中期後葉から後期の集落群の変化と連動して成立したものであることは間違いない。周辺には、日吉台遺跡群の東に位置する加瀬台や、北に隣接する矢上台と西に続く台地、さらに西に位置する箕輪貝塚や殿袋遺跡など、弥生時代後期の規模の大きな居住域が展開すると考えられる遺跡が軒を連ねており、この一帯が、日吉台遺跡群の範囲を超えて、弥生時代後期の集落の密集地帯になっていた可能性も高い。なお、同様の居住域の密集は、ほかに影向寺一帯の遺跡群や、梶山遺跡・上台遺跡一帯にも想定することができると考えている。

弥生時代中期以降の東日本南部以西では、基本的に個々の集落は、水田稲作を基軸とした農耕が生業の中心となることや、生活必需品の外部依存度の高さなどから、地域に拡がる複数の集落との関係、つまり地域社会のまとまりの中でしか存在し得ないものとなっていた。それ故に、地域社会内外の不安定的状況を緩和し、その関係を安定化させるための、さまざまな社会の仕組みが生み出されるようになるのである。例えば、中期後葉の等質的・等規模的な環濠集落が散在する状況は、各集落の平等性を意識的に保つことで、生産の不安定性や経済的不均衡を平均化しようとする、共同体的規制の表れと評価することが可能である。つまり、そこでは、個々の集落が、他の集落との互恵的な関係の中で経済的に突出することを意識的に抑え、その結果、地域社会の安定性が維持されるような社会の仕組みの存在を、想定することができるわけである。

そうした個々の集落の等質性・等規模性が失われた後期の地域社会では、当然、別の仕組みによって地域社会のまとまりが維持されていたものと考えられる。私はそこに、集落間に生じる不安定的状況を調整し、地域社会内におけるモノや情報、人の動きを管理する役割を担う、特定の個人や集団が、ある程度恒常的に存在していた可能性を想定したいと思っている。そうした状況を想定すれば、個々の集落の平等性を、それぞれが意識的に維持しなくても個々の集落の存続が保証され、結果として、周辺の環境に応じた柔軟な集落の形成が可能になるわけである。弥生時代後期といえば、中期後葉以上に、人口の増加や利器類の鉄器化が進み、一層水田稲作への依存度や生活必需品

の外部依存度が高まっていた時期である。そうしたなかで、地域社会外部との対外交渉の代表者であり、かつ地域社会内の経済的不均衡やさまざまな軋轢を調整する、中心個人・集団の役割が大きくなっていったのだと理解することができよう（安藤・津村 2006）。

日吉台遺跡群は、多摩川南岸域、鶴見川流域に拡がる集落群、及び下流域に展開する大規模な集落遺跡群の中央付近に位置しており、かつ多摩川流域と鶴見川流域を結びつける、まさに「要」の位置にある遺跡群である。さらに、弥生時代後期～古墳時代前期前半の大規模な竪穴住居址という、特異な遺構が複数みられる点を考慮すれば、日吉台遺跡群が、多摩川南岸域、鶴見川流域に展開していた地域社会のなかにあって、先述のような中心的役割を担う個人・集団を内包する集落であった可能性は充分に想定できる。

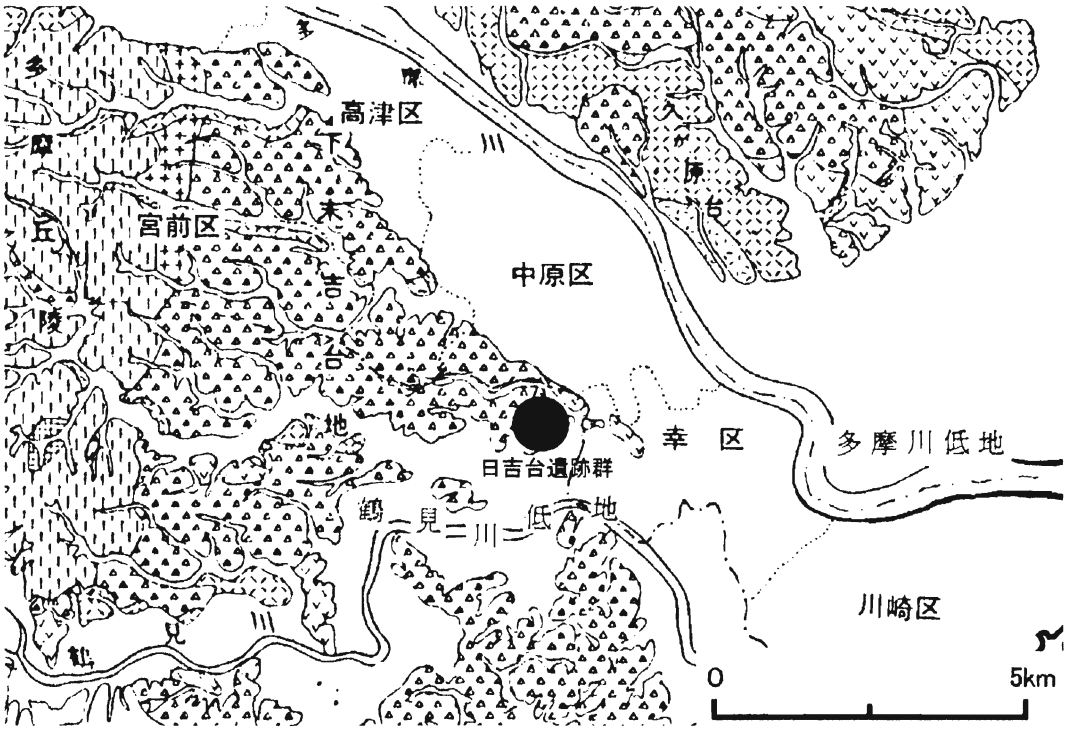
日吉台遺跡群の集落の終焉からしばらく後の、古墳時代前期の後半～終末になると、日吉台の東方 500mの位置に加瀬白山古墳が、そして北に隣接する矢上台に観音松古墳が、相次いで築かれる。これらはともに、墳丘長が 100m近くに達する大型の前方後円墳であり、多摩川南岸域、鶴見川流域の地域社会の中心人物の墓と考えられるものである。もちろん、この時期には、すでに日吉台に大規模な集落は存在しない。しかし、日吉台遺跡群に隣接した位置に、こうした大型前方後円墳が存在することは、その直前までに日吉台遺跡群の集落が担っていた役割・意味と無関係であったとは考えにくい。

もちろん、これらの仮説を検証するためには、まだまだ多くの調査と研究の蓄積が必要である。そのためにも、一度は忘れかけられた、弥生時代・古墳時代の研究における日吉台遺跡群の重要性を再認識し、近年まで続いた無意味な破壊を二度と繰り返さないよう、しっかりとした保存対策を講じることが求められているのである。

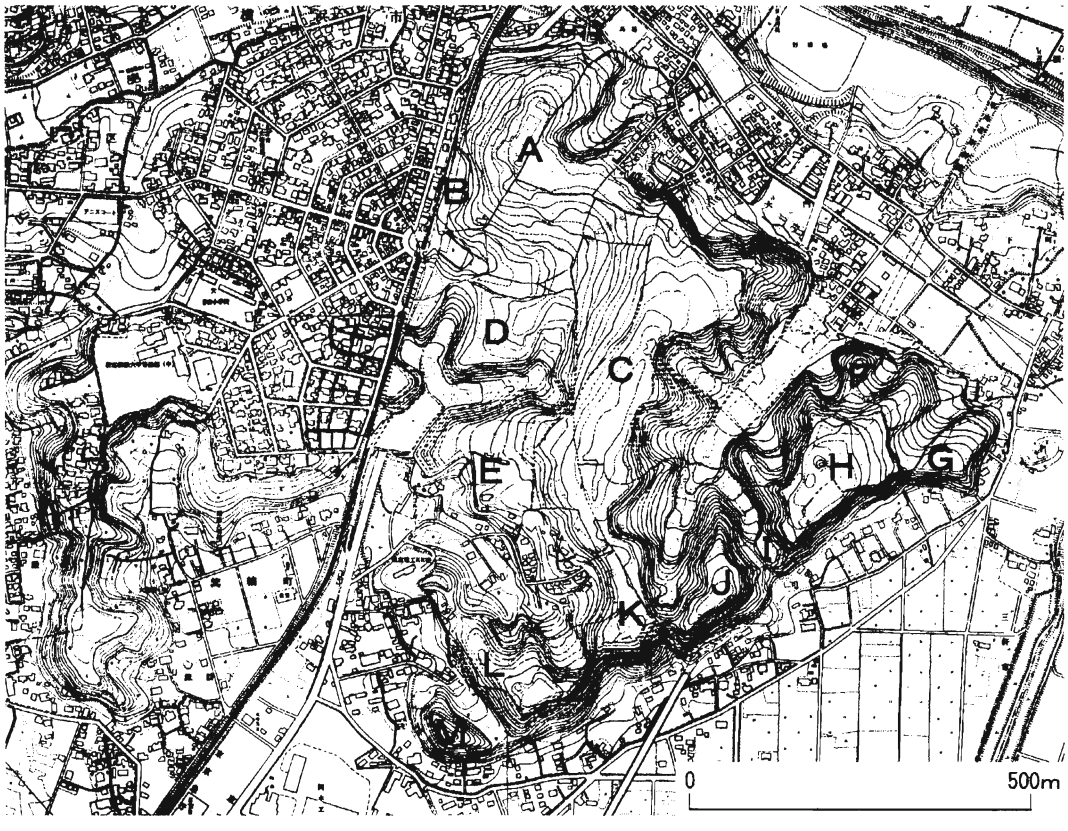
なお、本稿は、慶應義塾大学日吉キャンパス 2007 年度部門内調整費・教養センター委託事業「新しい教養授業の支援」、及び 2007 年度高梨学術奨励基金「横浜市日吉台・矢上台遺跡群の研究」の成果の一部である。

＜引用文献＞

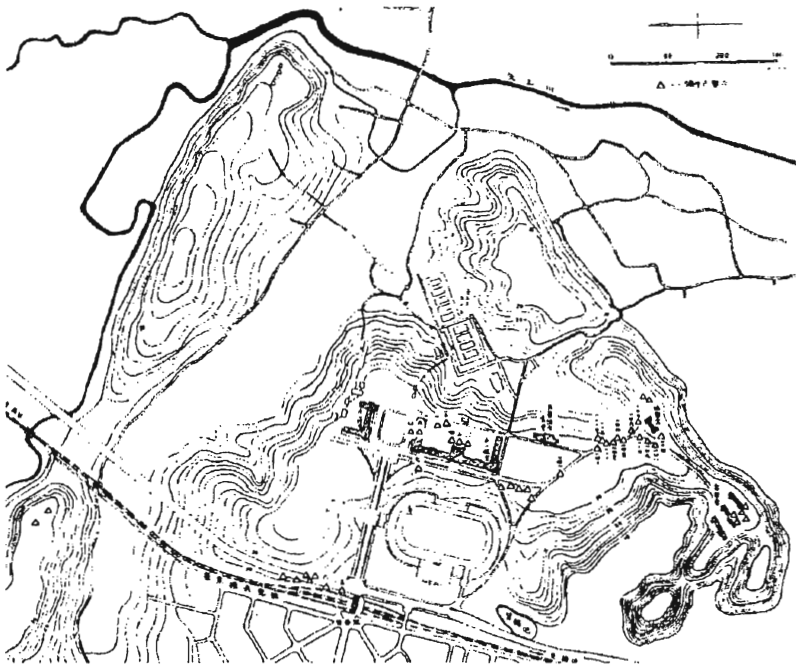
安藤広道・津村宏臣　2006「DEM による弥生時代集落立地の分析」『実践考古学 GIS』NTT 出版
清水潤三　1943「昭和十五年度日吉弥生式竪穴調査報告」『史学』第 21 巻第 2 号　三田史学会
清水潤三　1955「日吉に於ける考古学研究史」『Archaeology』21 号　慶應義塾高等学校考古学研究会
清水潤三　1965「神奈川県横浜市日吉町遺跡」『日本考古学年報』13　日本考古学協会
諏訪下北遺跡発掘調査団　1990『諏訪下北遺跡』
西岡秀雄　1940「日吉臺弥生式竪穴発掘調査報告」『史学』第 18 巻第 4 号　三田史学会
橋本増吉　1934「日吉臺住居址發掘報告」『史学』第 12 巻第 1 号　三田史学会
広瀬治男　1961「神奈川県横浜市日吉町 264　第 1 号古墳・第 2 号古墳報告」『Archaeology』27 号　慶應義塾高等学校考古学研究会
水野順敏・近藤真佐夫　1984「諏訪下遺跡」『日本窯業史研究所年報』Ⅲ



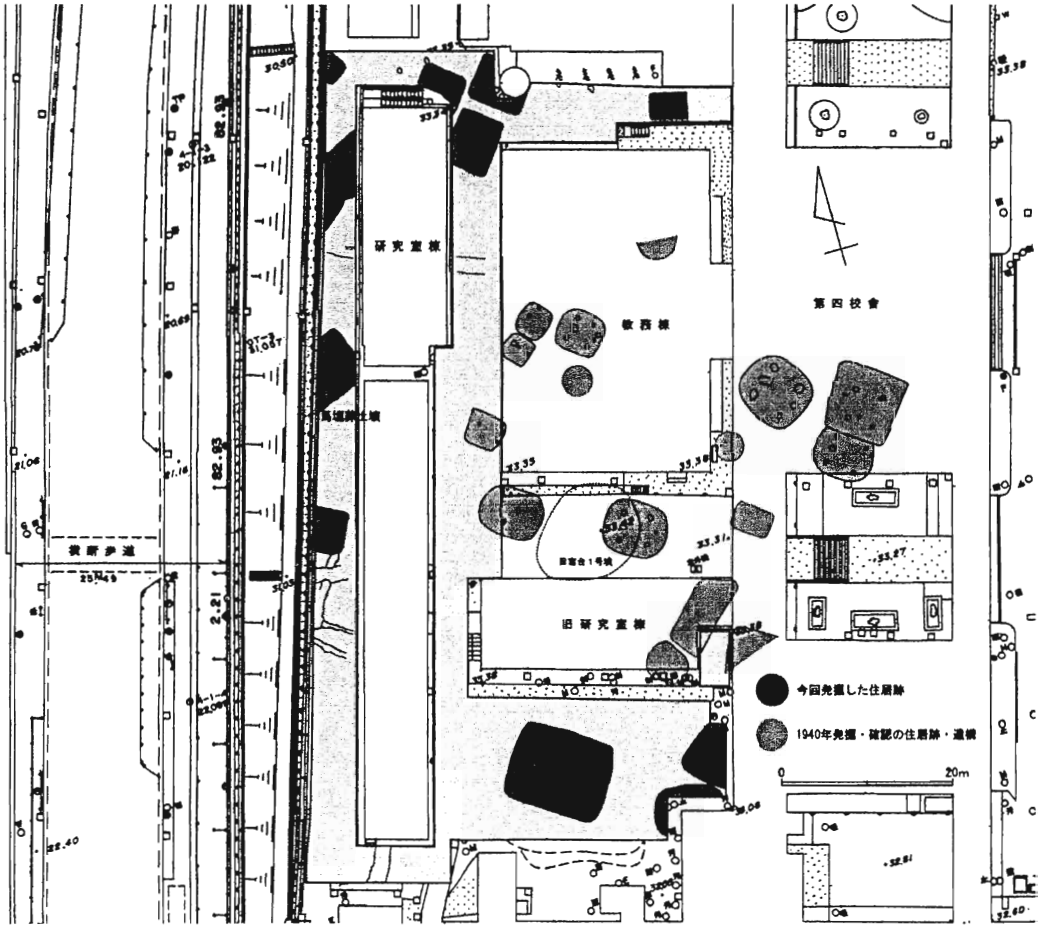
第１図　日吉台遺跡群の位置



第２図　日吉台遺跡群全体図（1960 年の地図に 1929 年の地図を合成）



第３図　1940 年ころまでに発見されていた竪穴住居址の分布



第４図　Ａ地区遺構分布

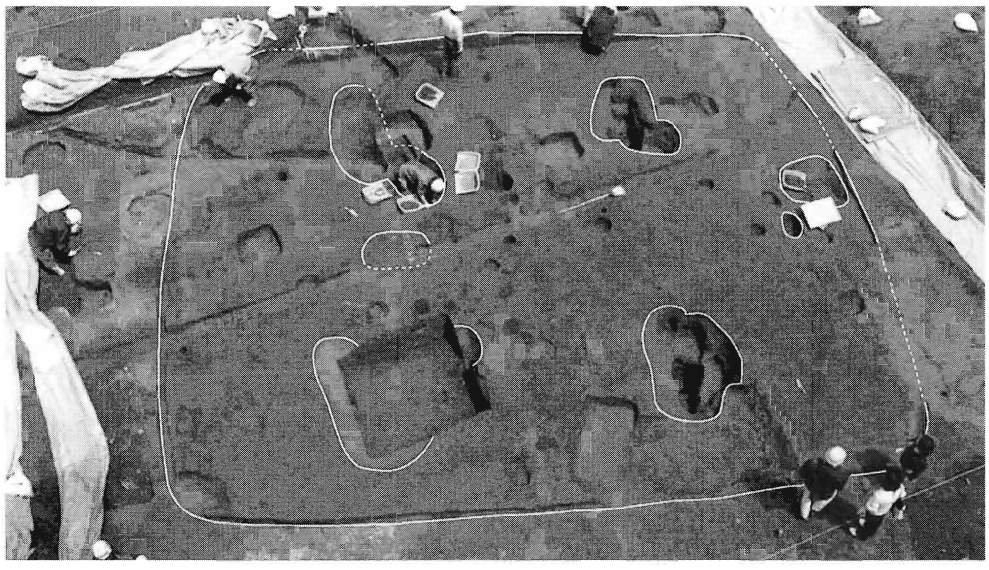
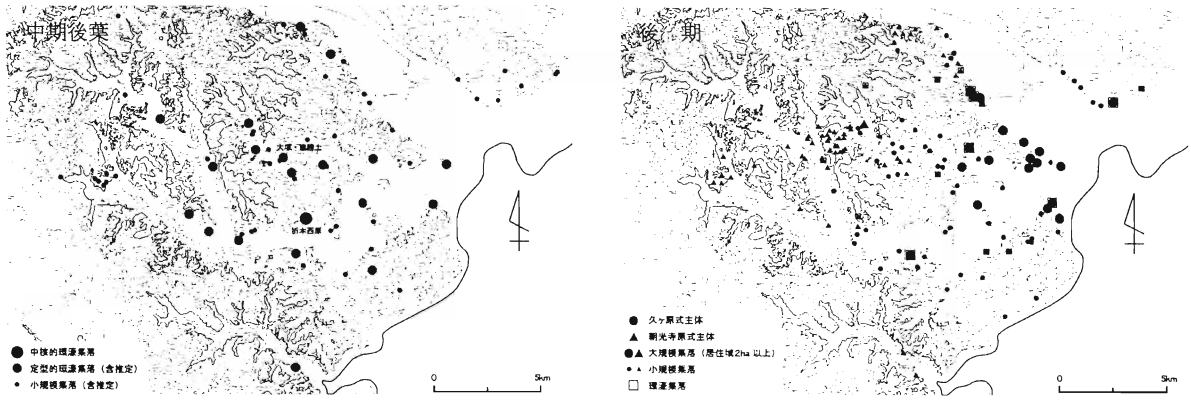


写真１　Ａ地区大型竪穴住居址

写真２　Ｃ地区発見の竪穴住居址



第５図　多摩川南岸・鶴見川流域における中期後葉と後期の集落遺跡分布

藤沢市No. ５７遺跡

三ッ橋　正夫

１．　**遺跡の名称**　藤沢市№５７遺跡

２．　**所　在　地**　藤沢市本藤沢二丁目 6067－1

３．　**調査面積**　1400 ㎡

４．　**調査原因**　集合住宅新築

５．　**調査期間**　株式会社　博通

６．　**調査担当**　三ツ橋正夫

７．　**調査期間**　2007 年 5 月 18 日～同年 8 月 24 日

８．　**調査概要**

① 遺跡の位置と概要

調査地はJR 東海道線・小田急江ノ島線藤沢駅から北西方向に約３km、小田急善行駅から南西方向に約１km の稲荷台地と呼称される台地上に位置する。

稲荷台地は旧石器時代から奈良・平安時代に至る遺跡包蔵地であり、弥生時代においては大規模集落址として周知されている。埋蔵文化財調査は 1963 年以来数多く行なわれており、Ｄ地点では弥生時代後期の竪穴住居址 200 件が検出された他、本調査地に近接する石名坂遺跡・引地脇遺跡においても弥生時代中期後葉及び後期の住居址、断面Ｕ字状・Ｖ字状を呈する溝、弥生時代後期の方形周溝墓などが発見されている。

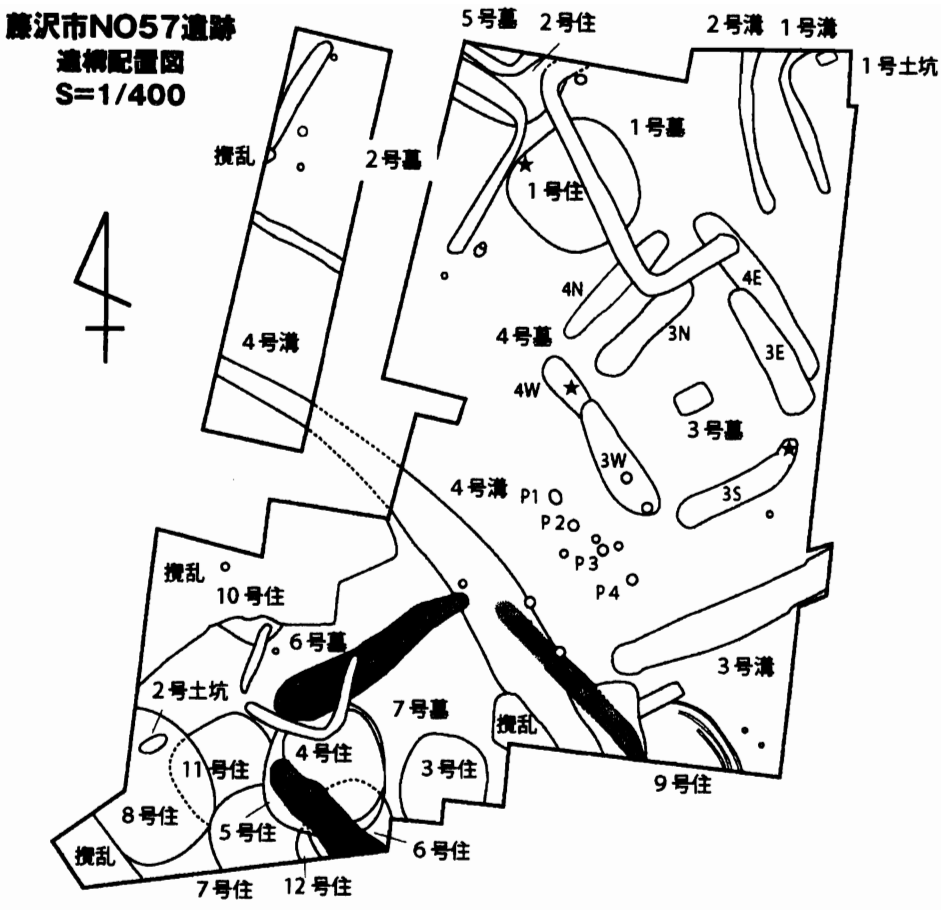
② 調査の経過

調査は排土置き場を確保する都合上、調査区北半と南半との２回に分けて行なった。北半の調査は５月 18 日～7 月 4 日、南半の調査は 7 月 5 日～8 月 24 日まで行い、8 月 24 日をもって全ての調査を終了した。

③ 発見された遺構

調査区西側および調査区南東角付近はローム層の標高が高く、現代の削平を強く受けており、表土を剥がした現地表下約 0m～0.4m・海抜約 45.5mのローム層が遺構確認面となる。調査区東側は深い谷となり、最深部で現地表下約２m・海抜約 43mを測り、黒褐色土層あるいは暗褐色土層が遺構確認面となる。

発見された遺構は竪穴住居跡 12 軒、方形周溝墓 7 基、溝状遺構 4 条、土坑 2 基、ピット 23 口で、中近世以降と考えられる溝状遺構 2 条、土坑 1 基を除き、すべて弥生時代中期後葉および弥生時代後期の所産と考えられる。出土遺物は弥生式土器および石器類で総量はテン箱約 70 箱である。



＜住居跡＞

３号・４号・５号・６号・７号・８号・１１号・１２号住居址は調査区南西側の比較的平坦な地域に密集して検出されており、居住域は更に南側の調査区外へ展開していくものと考えられる。時期は中期に帰属すると思われる。

１号住居址は弥生時代中期後葉の所産と考えられ、調査区西側の比較的平坦な地域の縁辺に谷を望むように立地している。内部施設として、奥壁沿いの土壙内に正位の壺型土器と逆位の甕型土器が合わさった状態で埋設されていた（遺構配置図★印）。

＜方形周溝墓＞

３号・４号方形周溝墓は弥生時代中期後葉の所産で、西溝・東溝がそれぞれ重複しており、切り合い関係から３号方形周溝墓は４号方形周溝墓より新しい。南溝は１条しか検出されておらず、３号・４号方形周溝墓で共有されていたと思われる。

４号方形周溝墓の西溝で合わせ口の甕型土器が検出されており（遺構配置図★印）、覆土の状況から溝の埋没がある程度進んだ時点で土壙を掘り込んで設置されたと考えられる。また、南溝の東端（遺構配置図★印）でも、壺型土器が２つ重なった状態で検出されている。

７号方形周溝墓は南西側の住居址群より新しく、また環濠と推定される溝（４号溝状遺構）の埋没後に構築されており、集落内の土地利用の変化を示している。

１号・２号･５号・６号方形周溝墓はコーナー部分が連結する形態をもち、弥生時代後期の所産と考えられる。

＜溝状遺構＞

１号・２号溝状遺構は出土遺物が少なく明確には言えないが、覆土の状態から中近世以降の所産と考えられる。

３号・４号溝状遺構はいずれも弥生時代中期後葉の所産で、断面Ｖ字状を呈し、環濠と考えられる。３号溝状遺構は調査区南東側の平坦な地域の縁辺に沿って立地し、西側は４号溝状遺構の手前２ｍ程の地点で収束している。４号溝状遺構は覆土中でロームブロックを貼り付けた硬化面が検出されており環濠としての機能が終わった後の、埋没過程でのある時期、二次的な利用があったものと推測される。

＜土坑＞

１号土坑は古墳時代以降、２号土坑は弥生時代の所産と考えられる。

＜ピット＞

ピットは23口検出された。覆土の状態などからいずれも弥生時代の所産である可能性が高い。調査区北西側、南東側の平坦面で検出されたピットのいくつかは床面を現代の削平により消失した住居の柱穴と考えられる。３号・４号方形周溝墓の南西側にまとまって検出されたピットのうちＰ１～Ｐ４は柱穴列となる可能性がある。周辺のピットも何らかの施設と考えられるが、明確なセット関係を見出すことは出来なかった。

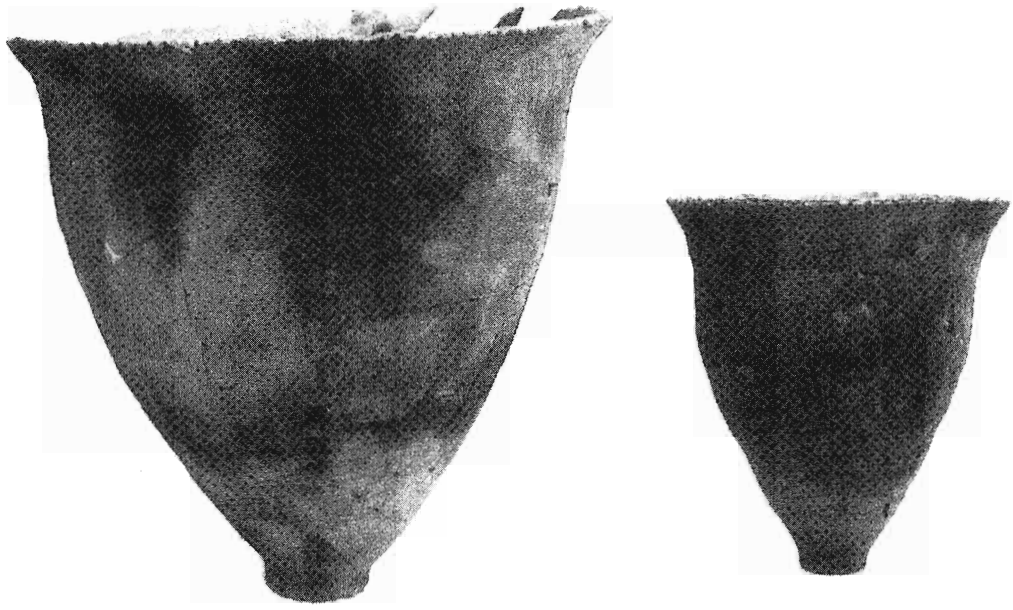
④ 出土遺物と時期の概要

出土遺物を見ると、壺型土器の文様に櫛描文を採用するもの・縄文を併用するもの・縄文のみによって構成するものなどバリエーションがあり、甕型土器も器形や口唇部の装飾などに変化を辿れる可能性がある。大まかではあるが３号・４号方形周溝墓、３号・４号溝状遺構の出土遺物は櫛描文の採用等、比較的古い傾向が見られ、１号住居址出土のものはそれらより若干新しくなる可能性がある。但し、４号溝状遺構出土の土器に関しては上層出土のものと下層出土のものとに時間差を捉えられる可能性があり、覆土中で硬化面が検出されていることも踏まえて、遺構の継続期間には注意を払う必要がある。

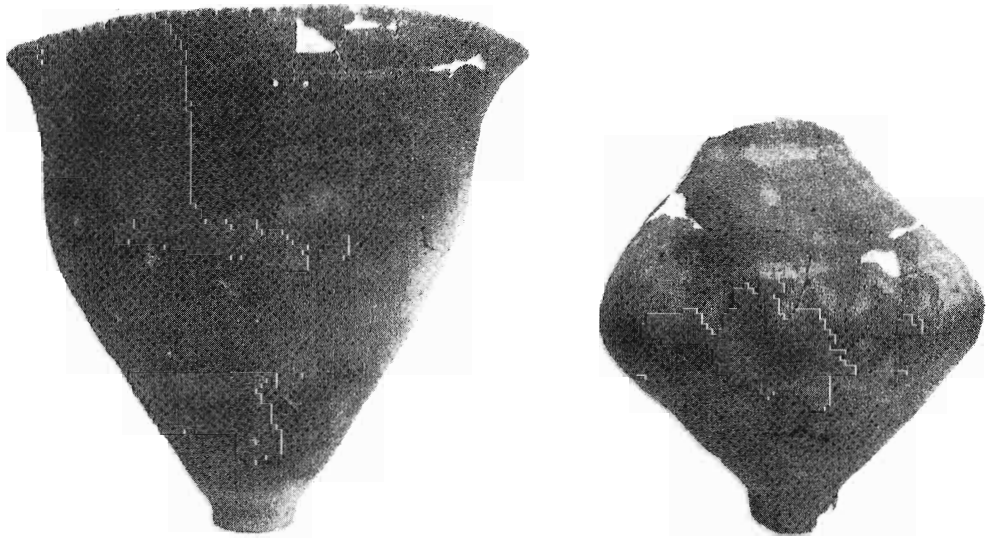
⑤ まとめ

今回の調査では、方台部に及ぶ切り合いを持つ方形周溝墓、土器棺、環濠と考えられる溝状遺構の二次利用等、類例の少ない発見があった。また、中期後葉の土器が良好な状態で多数出土しており、稲荷台地遺跡群の資料としてだけでなく、該期の弥生社会を考える上での貴重な資料と成りうる内容と思われる。

（『湘南考古学同好会』110　2008年2月9日から転載）



4号方形周溝墓西溝 出土土器



1号住居址 出土土器

神奈川弥生初期文化の新知見

－「集落」遺跡を中心に－

谷口　肇（神奈川県教育委員会）

1　神奈川県域における弥生時代初期（前期～中期初頭）遺跡の認識の変遷

①1980 年代まで

○　主に採集資料や小規模調査で遺跡が語られる。

・　永らく「再葬墓」

→　引き合いに出されるのは中期中葉の秦野市平沢北開戸遺跡。

・　1972 年における秦野市平沢同明遺跡の調査。

→　ただし専ら脚光を浴びたのは搬入品の東海系「遠賀川式」壺。

→　トレンチによる部分的な調査にとどまったこともあってか、集落遺跡としての実態は不分明のまま、注目度は必ずしも上がらず。

・　神澤勇一氏による津久井町(現相模原市)三ヶ木遺跡や山北町堂山遺跡など初期弥生遺跡の相次ぐ報告。

→　神澤氏の眼目は新土器型式の設定（「三ヶ木式」「堂山式」）と紹介。

→　その後の遺跡の実態の追求までには至らず。

②1990 年代の大規模調査による新たな遺跡の発見

○　小規模のものがほとんどであるが、様々な立地の場合があることが確認される。

・　山北町堂山遺跡の本格調査

→　平野を見下ろす丹沢山麓の「高地性」？の立地

→　埋没谷から大量の土器出土、様々な系統の土器、時期が前期末に遡る。

→　土坑の検出、ただし内部より遺物僅少。

・　厚木市及川遺跡における「前期末」の再葬墓の発見。

→　低地に近い丘陵の末端。

→　東北系変形工字文土器と東海影響在地化条痕突帯壺の共伴。

→　ただし、集落域は不明確。

・　清川村宮ヶ瀬遺跡群（上村遺跡、北原遺跡）。

→　丹沢山中の盆地内段丘上における遺跡の確認。

→　焼土址と遺物包含層の組み合わせ。

→　多量の「甕」「深鉢」の出土、顕著な煮沸の痕跡。

→　一方で、なぜか浅鉢・碗類は僅少。

→　「定住」した集落とは断定できないまでも生活の痕跡ではある？。

・　逗子市池子遺跡群における谷戸部の小規模遺跡の確認。

→　小規模ながら出土土器の系統は多彩

→　似たような地形の遺跡に横浜市大場富士塚遺跡

→　埋没していて発見されにくいだけなのか？

③最近の調査による新知見

○　西相模における最近の発掘調査事例。

・　大井町矢頭遺跡
　→　わずかな出土量の遺物包含層だが、面的に広がる炭化物検出。
・　小田原市前川山王前遺跡
　→　相模湾を望む砂丘上の小規模遺跡
・　大井町中屋敷遺跡
　→　小盆地内の小丘陵上における土坑群検出
　→　土坑内より炭化米・稗・粟出土
　→　住居址は不明確だが、付近に生活の場が存在していたことは確実
・　秦野市平沢同明遺跡
　→　秦野盆地中央部における湧水地付近に立地（集落遺跡らしい立地）
　→　包含層内から豊富な出土遺物、多数の土坑群発見

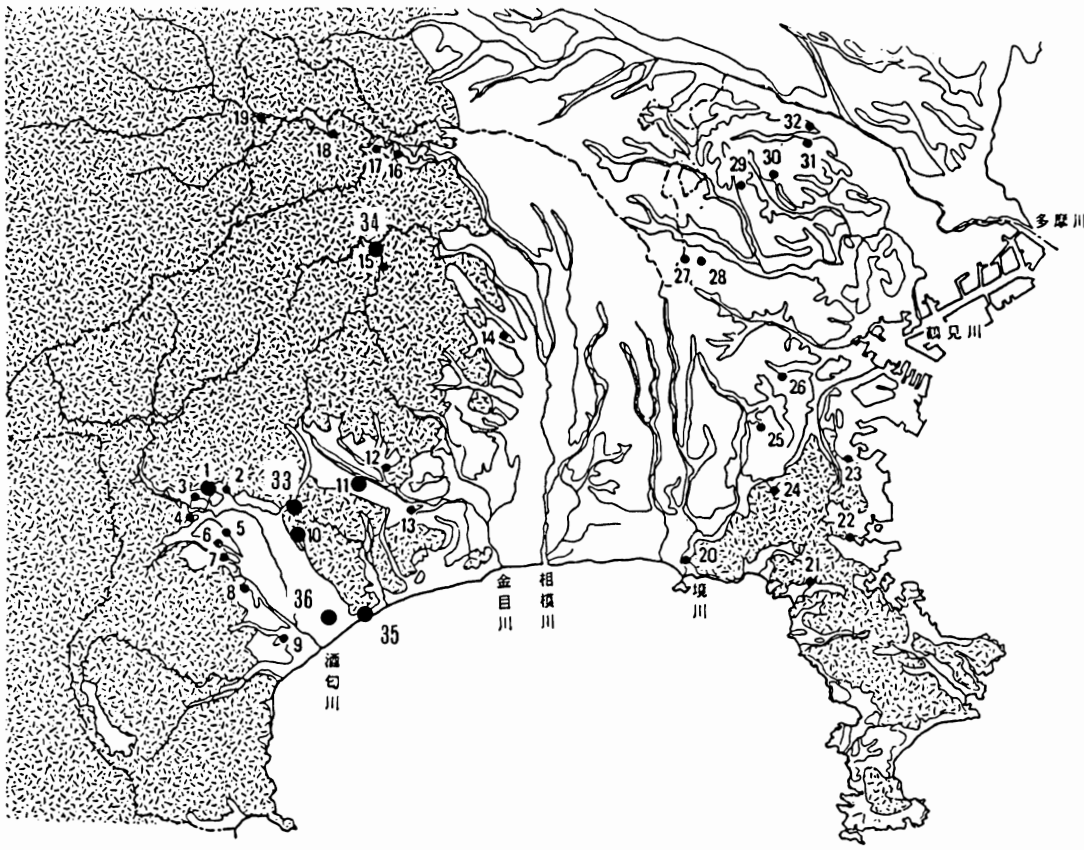
2　神奈川縄文晩期～弥生初期「集落」遺跡の動向

○　縄文時代晩期中頃までの集落遺跡は拠点的。
　→　それまで継続していた諸遺跡がこの段階でなぜか衰退。
○　晩期終末（浮線紋段階）は小規模分散的。
　→　ただし、晩期中頃から継続する場合もあり。
○　弥生初期はさらに分散的になり、新規の立地となる場合が目立つ。
　→　晩期中頃～終末からさらにここまで連続するのは平沢同明遺跡ただ一つ。
　→　「集落」らしい遺跡と言えるものは、焼土址と遺物包含層のセットだけで、竪穴住居など明確な住居的遺構はなぜか未確認。

3　弥生初期小規模「集落」の解明に向けて

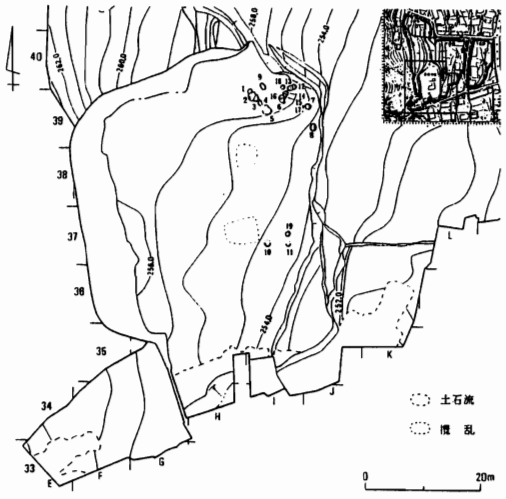
○　弥生前期～中期前葉までの間、遺跡は小規模のままで、数的にも顕著な増加無し。
　→　西方からの文化の影響、中でも「農耕」を実践しているらしいにも関わらず。
　→　ただし「陸稲」ならば相模野台地周辺などに遺跡の分布が広がるはず。
　→　それら小規模遺跡周辺に湧き水・低湿地が存在するケース多し。水稲耕作か？
　→　また、そのような小規模遺跡でもほぼ全てで西方、東方、北方など搬入品含む異系統土器がしばしば出土。規模が小さくても広範な地域間交流の場であったことは確実。
○　焼土址と遺物包含層の遺跡を積極的に「集落」と把握してよいのか？
　→　「焼土」や「炭化物」などのより細かな科学的分析の必要性。
　→　周囲を囲むような境界施設的遺構の追求。
○　「農耕」の実態の追求
　→　低地遺跡の調査
　→　焼土・遺構覆土中における炭化米・種子の追求。
　→　土器の器面に見られる圧痕の詳細な観察（稲穂以外に極小円形のものなど）
○　唯一の拠点集落遺跡と言える平沢同明遺跡が鍵を握るか？
　→　平沢同明遺跡を代表とする少数の拠点的集落と多数の小規模集落？
　→　中期中葉（後半）における平沢集落の衰退と（小田原市）中里集落の出現
　→　在地的伝統的立地から西日本的機能的集落への交代

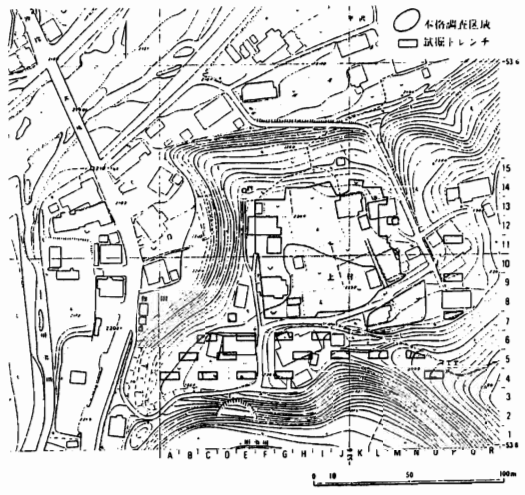
神奈川県下の縄紋終末～弥生初頭の遺跡



1	堂山	12	草山	23	杉田
2	カラス山	13	遠藤原	24	桂台
3	山北駅南側	14	及川宮ノ西	25	松原越
4	内山尾尻	15	上村	26	境木
5	怒田原	16	中野大沢	27	西之原
6	怒田上原	17	三ケ木	28	霧ケ岡
7	関本出口	18	鼠坂	29	大場富士塚
8	（仮）塚原	19	中村原	30	オオデラ
9	諏訪の前	20	大源太	31	上作延南原
10	中屋敷	21	池子	32	久地伊屋ノ免
11	平沢（同明）	22	金沢八景駅北側	33	矢頭
				34	北原
				35	前川
				36	中里

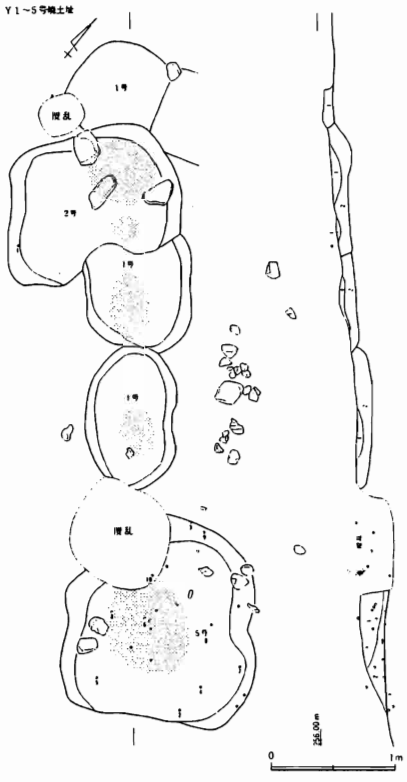
（谷口　肇 1991「神奈川県」『第１回東日本埋蔵文化財研究会 東日本における稲作の受容』より作成）

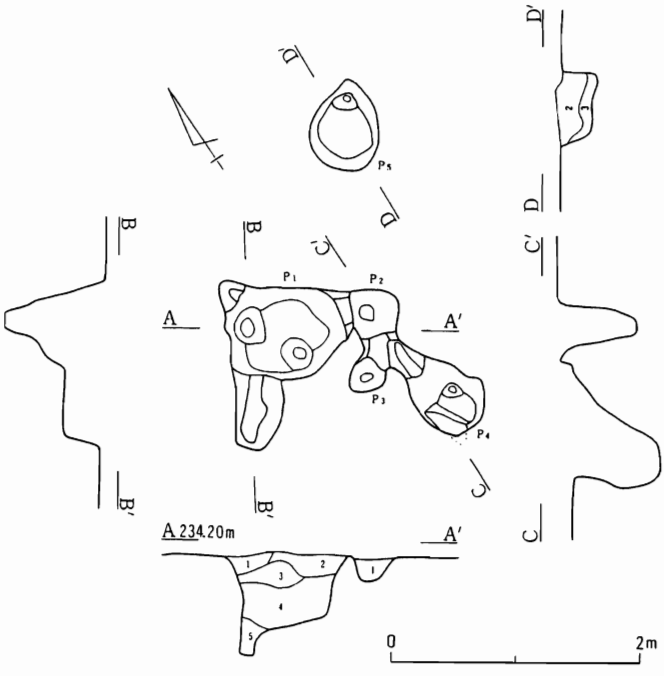


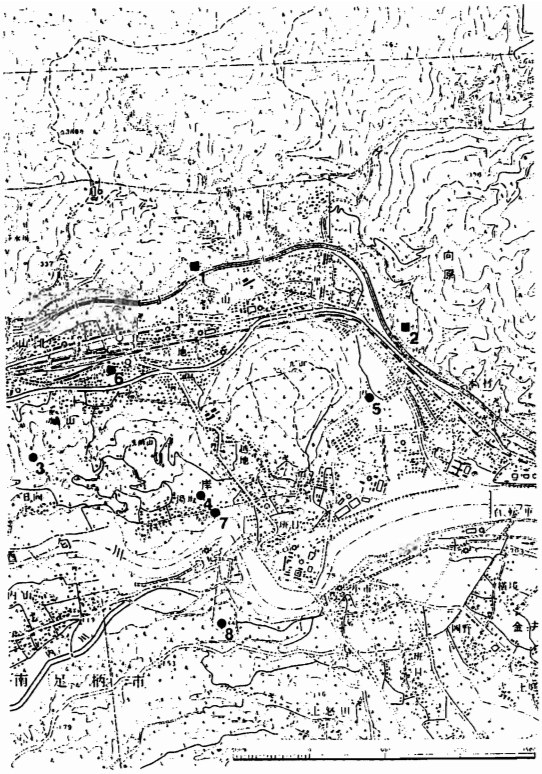


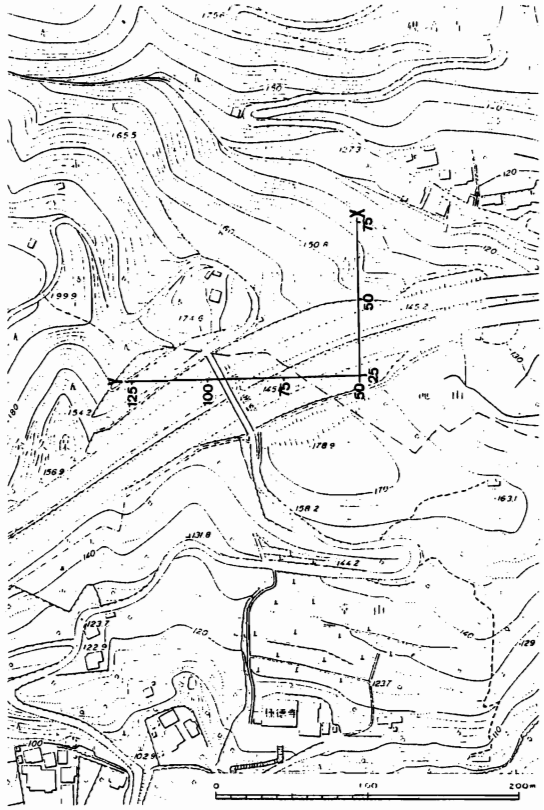
上－北原遺跡縄文終末～弥生初頭面全体図
下－北原遺跡検出焼土址群
（神奈川県立埋蔵文化財センター
1994『宮ヶ瀬遺跡群Ⅳ』より作成）

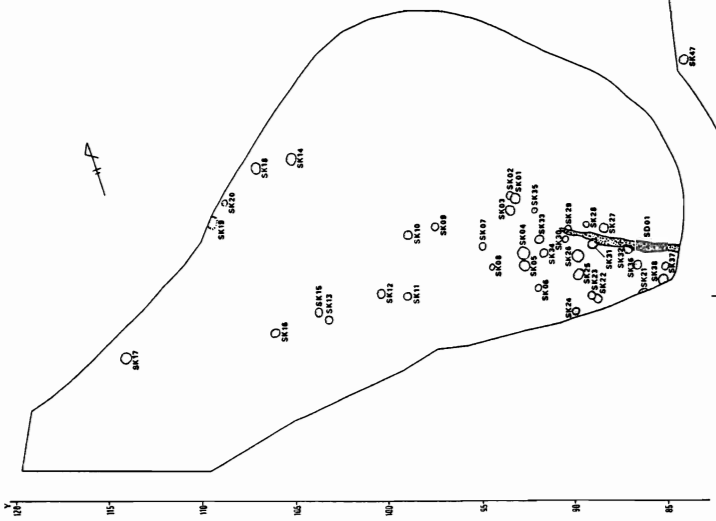
上－上村遺跡の地形
下－上村遺跡検出ピット群
（神奈川県立埋蔵文化財センター
1990『宮ヶ瀬遺跡群Ⅰ』より作成）

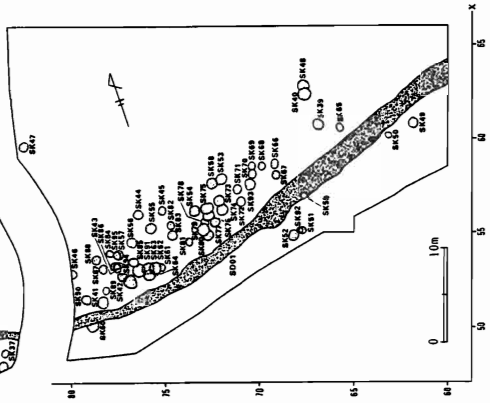








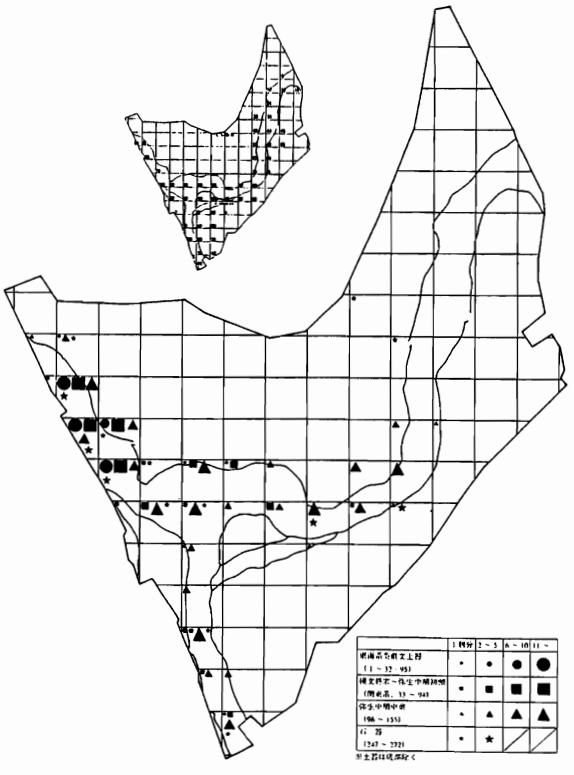




上－堂山遺跡の地形

下－堂山遺跡検出土坑群

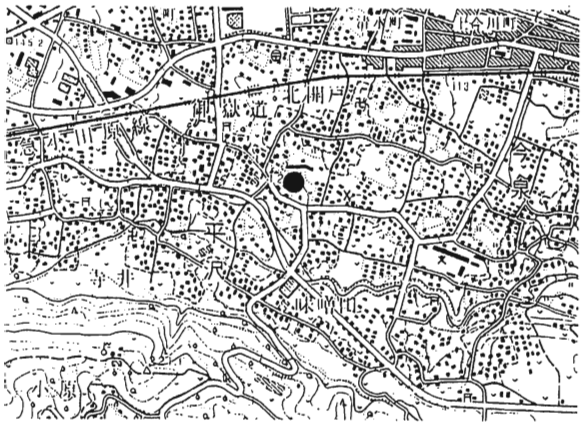
（山北町カラス山・堂山遺跡調査会・同遺跡発掘調査団 1988『カラス山・堂山遺跡』より作成）



上－池子遺跡群No.１－Ａ地点周辺弥生時代面全体図

下－同弥生時代旧河道内弥生時代前期～中期中葉遺物出土分布図

（かながわ考古学財団 1999『池子遺跡群Ｘ No.１－Ａ地点』より作成）



第１図　平沢同明遺跡位置図（１／25,000）

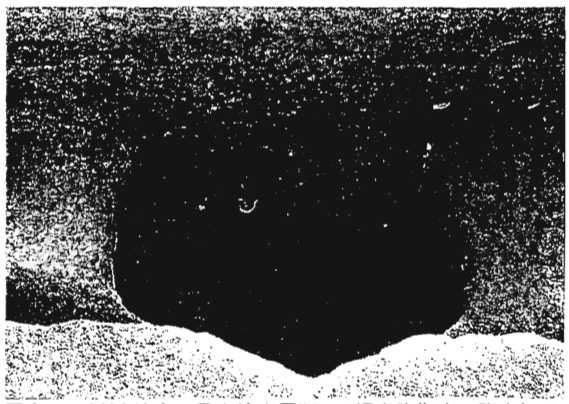
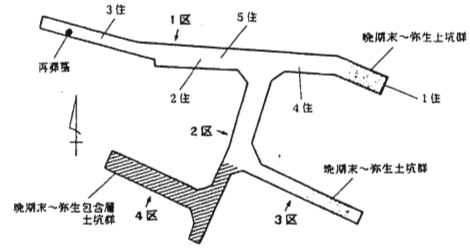
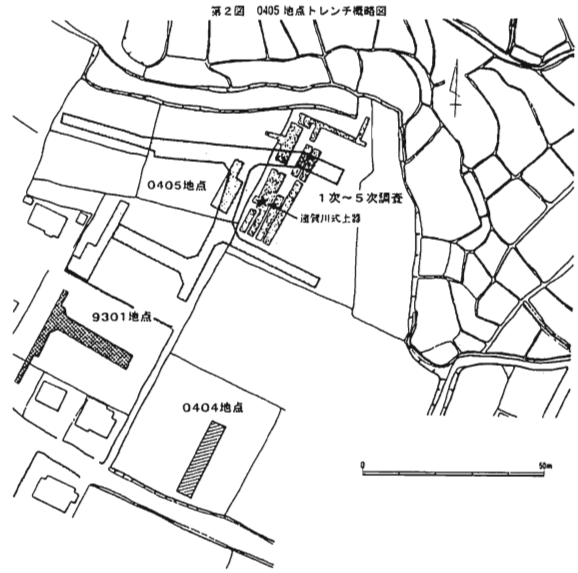


写真１　0404 地点１号土坑土層断面（縄文晩期末～弥生初頭）

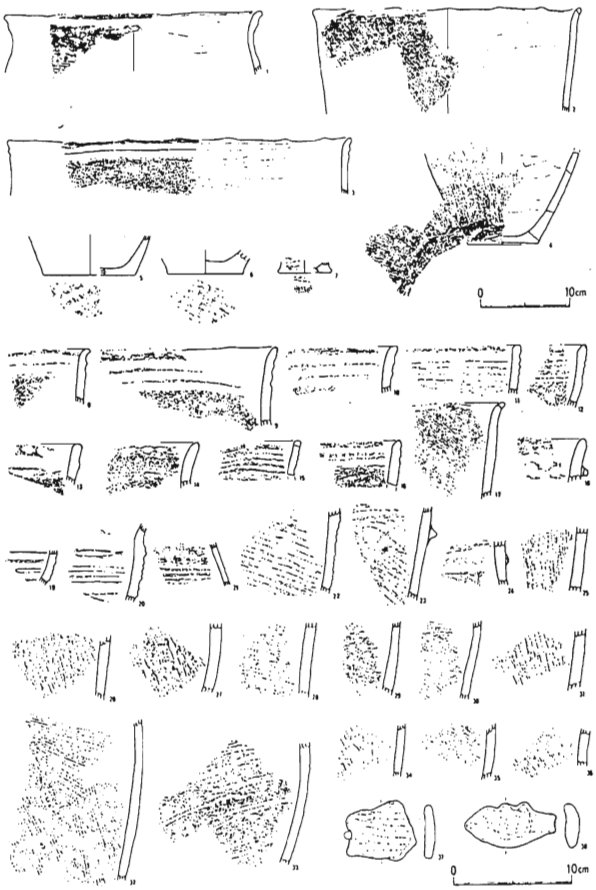


第２図　0405 地点トレンチ概略図

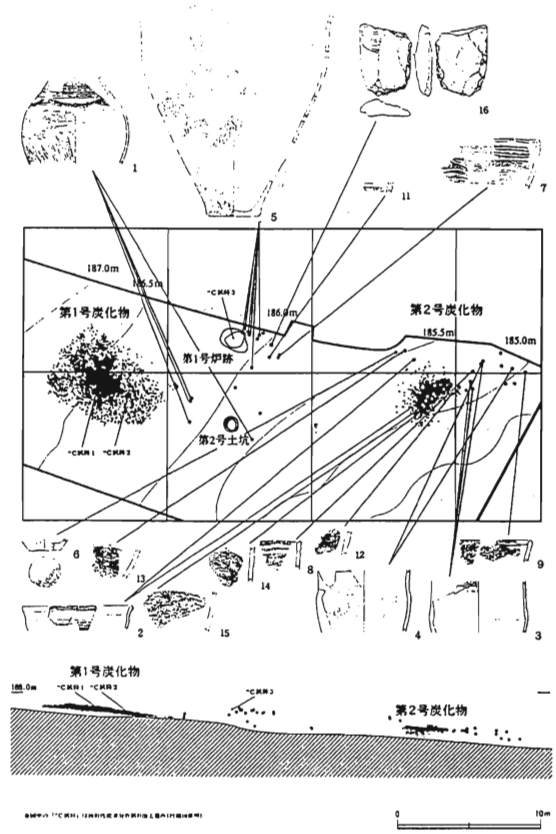


第３図　平沢同明遺跡調査区全体図（１／1,000）

（戸田哲也 2005「秦野市平沢同明遺跡」『第 29 回神奈川県遺跡調査・研究発表会』より作成）



前川山王前遺跡出土土器
（山田仁和 2000「前川山王前遺跡」『平成 12 年
小田原市遺跡調査発表会　発表要旨』より作成）



（かながわ考古学財団 1997『宮畑遺跡　矢頭遺跡　大久保遺跡』より作成）

図1　中屋敷遺跡の位置（1：25,000）

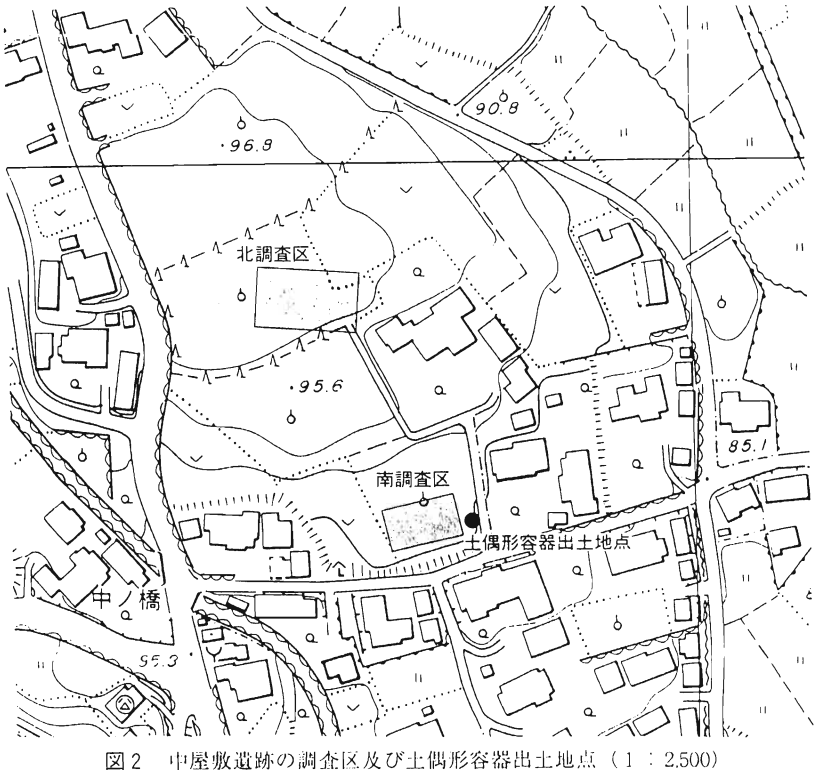


図2　中屋敷遺跡の調査区及び土偶形容器出土地点（1：2,500）

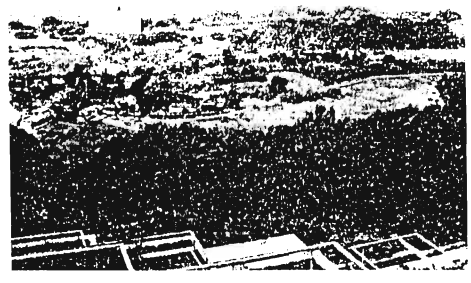


写真1　調査地遠景（西から）

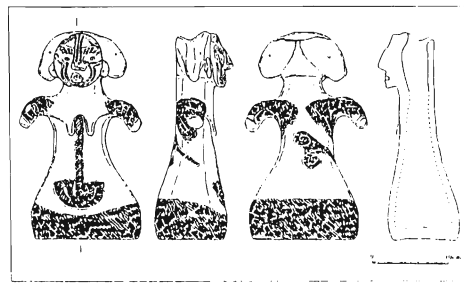


図3　土偶形容器（大井町史1997）

（山本輝久・小泉玲子 2005「中屋敷遺跡の発掘調査成果」『日本考古学』第 20 号より作成）

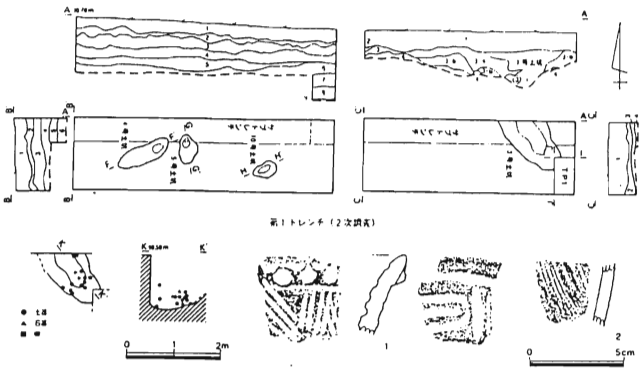

第1トレンチ（2次調査）

図4　南調査区　3号土坑検出状況及び出土遺物

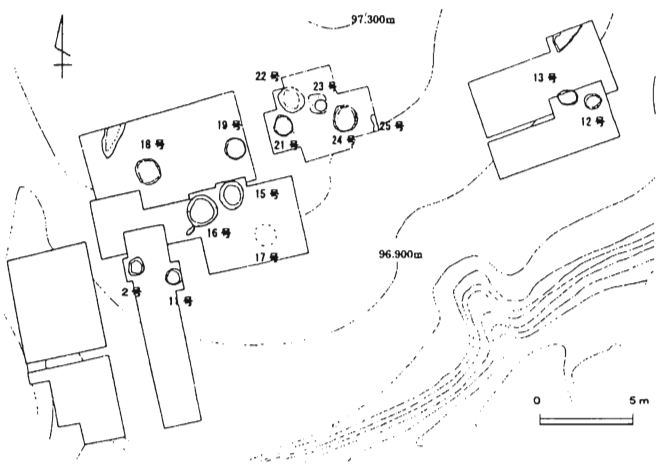


図5　北調査区　土坑検出状況

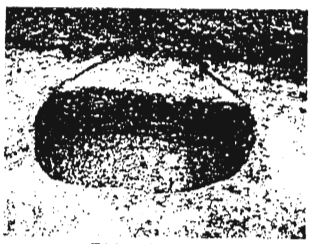


写真3　19号土坑半截状況

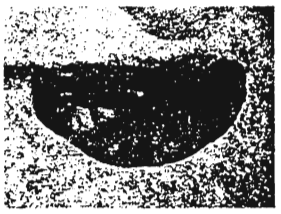


写真4　22号土坑半截状況（黒く見えるのが炭化物層）

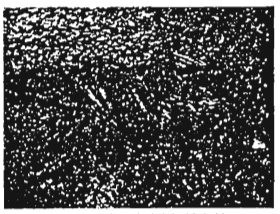


写真5　22号土坑炭化草本類出土状況

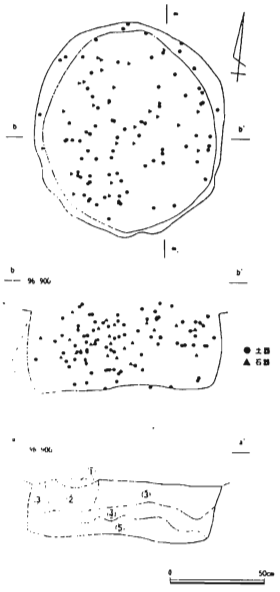


図6　19号土坑遺物分布及び断面図

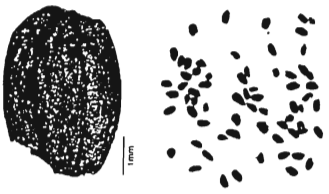


写真6　炭化米

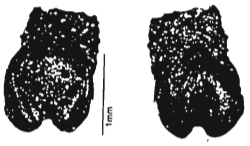


写真7　炭化アワ

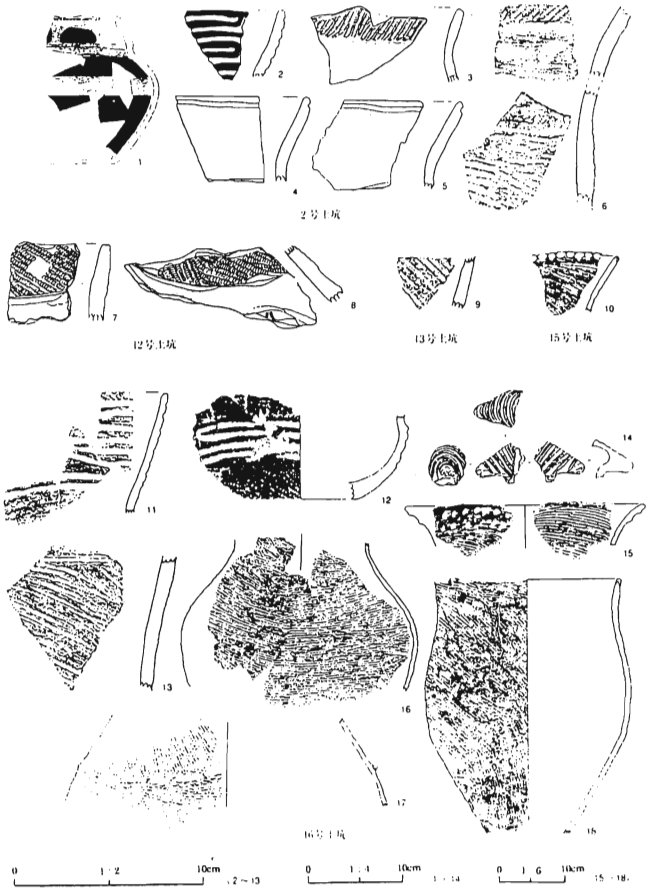


図6　出土遺物（1）　2・12・13・15・16号土坑

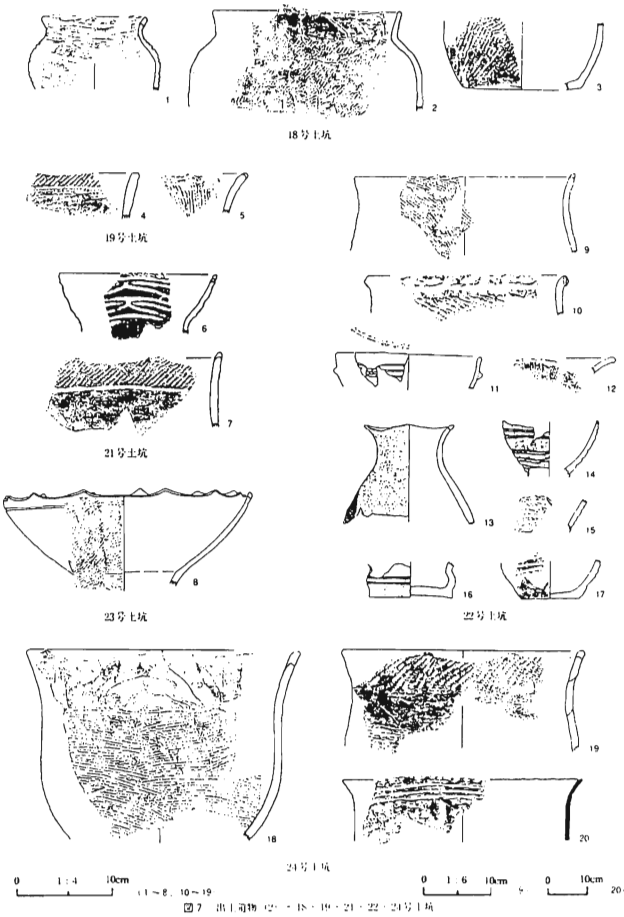


図7　出土遺物（2）　18・19・21・22・24号土坑

平成１９年度考古学講座

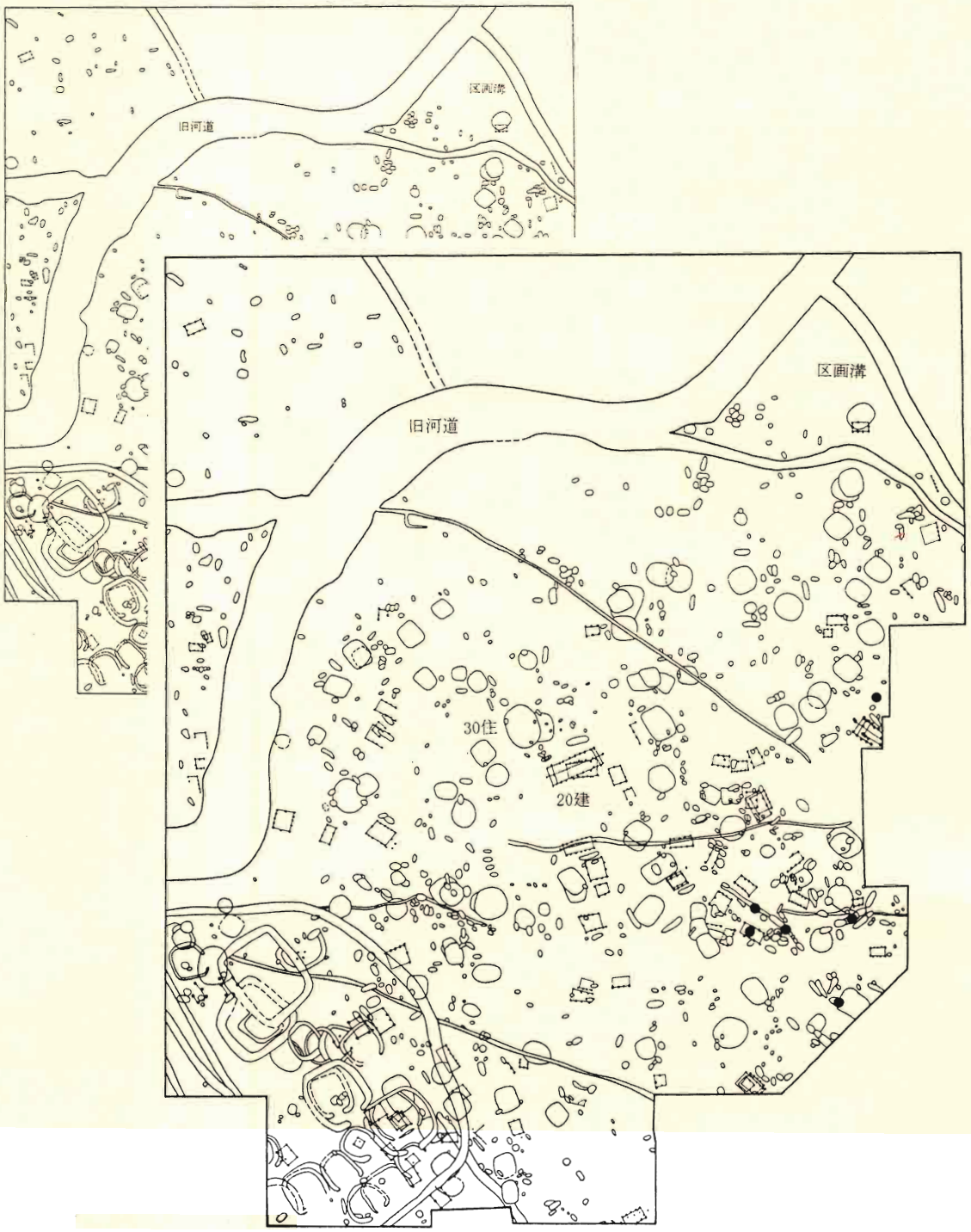
新 神 奈 川 ・ 新 弥 生 論

編　集　神奈川県考古学会講座担当

発　行　神奈川県考古学会

印　刷　株式会社　アルファ

平　成　２０年　（２００８）３月　２日


旧河道
区画溝
旧河道
区画溝
30住
20建